

〒371 前橋市上泉町 664-4  
前橋市教育委員会管理部文化財保護室  
TEL 0272-31-9531

# 寺 田 遺 跡

前橋市立元総社保育所移転に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和 61 年

前橋市埋蔵文化財発掘調査団





## 序

前橋市は、より健全な市街地の開発と住み良い街づくりの為の都市基盤の整備が各地で進められ、当地区は前橋都市計画事業元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業が実施されています。このような市民の快適な暮らしを願う区画整理事業と埋蔵文化財保護の問題は常にうらはらの関係にあり、前橋市埋蔵文化財発掘調査団では、両者の調整に鋭意努めているところあります。

この調査は、区画整理の為移転する市立保育所建設に先立って発掘調査を実施したものであります。

寺田遺跡は、国府推定地東側外郭線に隣接すると考えられる重要な遺跡であります。この地から遠く周囲を見渡しますと、北に了持、北東に赤城、北西に榛名の諸山が並立し、東に利根川、南は広大な関東平野へと続いている。この地こそまさに山紫水明、四神相応の地として古代人が国府の適地と選んだのもうなづける気がします。調査の結果古墳時代から平安時代に至る遺物及び遺構が確認された。遺物は、杯、甕、塊及び羽釜等と木製品の杵、椀・杭等多数検出された。遺構は、榛名山二ツ岳火山灰（F A）降下後の溝が確認された。

この調査を実施するに当たり終始御協力頂いた前橋市民生部福祉事務所、建築部建築課、都市再開発部区画整理課、及び猛暑のなか直接発掘調査に携わった作業員の方々に厚く御礼申し上げます。

最後に本調査報告書が一人でも多くの方々に活用され、地域の歴史解明の一助となれば幸いであります。

昭和62年3月31日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 関口和男

## 例 言

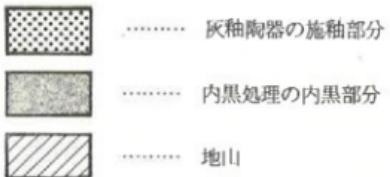
1. 本書は、前橋都市計画事業元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業に係る、昭和61年度前橋市立元総社保育所移転に伴う寺田遺跡発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、前橋市元総社町100番地10他5筆に所在する元総社保育所建設予定地部分について実施したものである。
3. 調査期間は昭和61年6月1日～9月30日にわたって前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長 奈良三郎）が実施した。
4. 調査担当者、畠田紀雄（前橋市教育委員会社会教育課文化財保護係長）、浜山博一（前橋市教育委員会社会教育課文化財保護係主任）、高橋正男（同）、前原 豊（同）、金子正人（スナガ環境測設株式会社 埋蔵文化財調査部長）。
5. 本調査における出土遺物は、一括して前橋市教育委員会が保管している。
6. 本書はスナガ環境測設㈱の埋蔵文化財調査部が作成に当り、執筆及び編集の総括を金子正人が当り、遺物実測は佐々木智恵子、角田朱美が行ない遺物遺構のトレースは松岡和香江が行った。作業事務を柴崎信江が行った。
7. 発掘調査の安全管理に荻野博巳があたり、測量作業は須永眞弘（測量士第52614号）が指導にあたった。
8. 調査に際して多大なる御協力を頂きました前橋市民生部福祉事務所、同市建築部建築課及び都市再開発部区画整理課の方々に厚く御礼申し上げます。
9. 本遺跡の調査及び整理に当たって下記の方々の御指導を頂きました。  
群馬県教育委員会文化財保護課、群馬県埋蔵文化財調査事業団、群馬大学教育学部新井房夫地学教授、高崎市教育委員会社会教育課文化財保護係、大胡町教育委員会、元総社保育所飯島慶子園長、野中孝吉。
10. 調査に参加した方々は次の通りであります。記して感謝いたします。  
新井恒喜 石川サワ子 岩田四郎 河西三明 加藤八重子 門倉喜代美  
金井福治郎 小林康典 近藤充郎 須田シゲル 原澤政雄 田村光子  
辻みつる 長谷川千代乃 長谷川とめ 平出トミ子 柳原久仁江

## 凡 例

- 各遺構の略号は次の通りである。

D-土坑 W-溝状遺構

- 各遺構実測図の縮尺は、平面図、土層断面図  $1/40$  を原則とした。
- 遺物実測図は  $1/3$  を原則とし、木製品及び大形器については  $1/4 \sim 1/10$  を使用し明示した。
- 遺構及び遺物挿図中のスクリーントーンは次のことを表す。



- 寺田遺跡では、北西隅を基点とする  $4\text{ m}$  グリットを設定した。

本文中の「G・5」は北から  $24\text{ m}$  西から  $20\text{ m}$  の位置のグリットを示す。

## 目 次

### 序

#### 例言・凡例

第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境	3
第1節 遺跡の立地	3
第2節 歴史的環境	4
第Ⅲ章 調査の方法	9
第1節 発掘調査の方法と進め方	
第2節 地形及び標準土層断面図について	
第Ⅳ章 検出された遺構と遺物	13
第1節 第1調査区の遺構	13
第2節 第2調査区の遺構	14
第3節 第3調査区の遺構	23
第4節 出土遺物の実測図	23
第5節 出土遺物の観察表	38
第Ⅴ章 まとめ	45
第1節 木製農工具について	45
第2節 地形と遺構と遺物について	47
第3節 その他	47

## 付 表 目 次

第1表 上野国府に係わる諸論攷	6
第2表 周辺遺跡	7
第3表 大溝出土遺物観察表	18
第4表 出土遺物の観察表	38

## 挿 図 目 次

第 1 図	推定国府関係図 .....	3
第 2 図	市内の地形的区分図 .....	4
第 3 図	周辺遺跡の位置図 .....	11
第 4 図	標準土層断面図 .....	10
第 5 図	第 1 調査区平面図 .....	12
第 6 図	大溝平面図 .....	14
第 7 図	水口造構平面図 .....	15
第 8 図	第 2 第 3 調査区平面図 .....	16
第 9 図	大溝土層断面図 .....	17
第 10 図	木製品実測図 .....	23
第 11 図	木製品実測図 .....	24
第 12 図	椀と木製品実測図 .....	25
第 13 図	木製品実測図 .....	26
第 14 図	木製品実測図 .....	27
第 15 図	木製品実測図 .....	28
第 16 図	出土銭拓本、木製品、小型土器、瓦実測図 .....	29
第 17 図	特殊遺物・瓦の実測図 .....	30
第 18 図	甕・杯・砥石実測図 .....	31
第 19 図	紡錘車・杯・高杯実測図 .....	32
第 20 図	須恵器杯・皿・高台付塊実測図 .....	33
第 21 図	高台付塊・甕実測図 .....	34
第 22 図	甕・羽釜・堵実測図 .....	35
第 23 図	甕・杯蓋・長胴甕実測図 .....	36
第 24 図	須恵器大甕・杯蓋・長頸瓶頸部実測図 .....	37
第 25 図	子日手辛鋤図 .....	46

## 図版目次

- 図版 1 第1調査区（A-O～A-1 グリット方向を望む）
- 図版 2 第3調査区作業風景
- 図版 3 大溝全貌空中撮影第3調査区全景
- 図版 4 第1調査区土坑-2土層断面 第1調査区全景  
水口遺構第2調査区全景 第2調査区水没状況 遺物出土状況No.19
- 図版 5 遺物出土状況  
No.18, No.12, No.15, No.1 ニセアカシ, 柳株出土状況
- 図版 6 遺物出土状況  
No.24, No.22, No.81, No.13, No.91, No.101, No.120
- 図版 7 遺物出土状況  
No.92, No.52, No.124, No.111, No.66  
G-4グリット獸骨出土状況
- 図版 8 遺物出土状況  
No.108, No.60, No.105, No.110, No.80, No.90
- 図版 9 挽、種子、木製遺物
- 図版 10 木製遺物、馬歛、ヒョウタン果皮、小瓶、青磁塊
- 図版 11 小型特殊遺物と瓦と杯
- 図版 12 杯、砥石と紡錘車
- 図版 13 杯、高杯、須恵器杯
- 図版 14 小型塊と皿、杯
- 図版 15 高台付塊、羽釜、甕、壺、埴
- 図版 16 壺、杯蓋、長頸壺肩部と頸部

## 第Ⅰ章 発掘作業に至る経緯

前橋都市計画事業元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業の実施に伴う元総社保育所の移転に先がけ、埋蔵文化財の包蔵地であることから前橋市福祉事務所と協議を進めていたが昭和61年5月26日～同年8月31日までの調査期間をもって施設の建設によって埋蔵文化財が破壊される恐れのある部分について、発掘調査することになった。（その後、調査区域内の家屋移転の実情に合わせ9月30日までの期間になった。）

### — 作業日誌より —

- 5.26 市役所にて打ちあわせ。
- 27 重機搬入、安全対策として防風ネット設置、調査事務所の資材搬入
- 28 プレハブ建込み。
- 29 電話電気の設置、木製品保存ケース搬入
- 3.1 調査現場周辺居住者に工事の件連絡訪問をする。  
現場事務所用水道設備設置
- 6.3 発掘作業用具搬入
- 4 第1調査区表土掘削 調査開始
- 5 ガス設備設置
- 6 座標軸決定
- 7 グリット設定、全体遺構実測開始（平面図1/100）
- 1.0 水準点測量 BM 110.00 メートルを設置す。
- 7.2 昨日の雷雨により調査区水没す、北面他2箇所崩壊す。  
4 通学児童の安全確保のため元総社小学校訪問
- 1.4 第1調査区調査完了の検査終了後 埋戻し開始  
第2調査区表土掘削開始
- 1.5 第2調査区安全対策用防風ネットを張る。
- 1.7 第1調査区埋戻しほぼ完了、水準点測量 BM 110.50 m 設置
- 2.8 F 10, 11 グリット内の溝発掘開始
- 8.8 第3調査区 関谷氏、引っ越し始まる。

- 1.7 第二調査区全域 雷雨により水没す。  
(水中ポンプ3台で汲出しに2日掛かる。)
- 2.2 関谷氏引越し完了 (家屋の解体始まる。)
- 2.7 第3調査区盛土部の掘削開始
- 2.8 第3調査区表土から水田床面迄、掘削開始
- 2.9 水田床面迄掘削終了
9. 1 水田床面からB軽石上面まで掘削  
5 縦杭数本確認される。
- 6 種子多数発見される。
- 1.9 新井房夫群馬大学教授来跡
- 2.9 発掘作業完了  
市教育委員会より埋戻しについて転圧するように指示あり。
- 3.0 埋戻し開始、安全防護柵取外し、資料及び掘削用具積込、マイクロバス、  
2tダンプ、キャリーダンプを使用
10. 1 埋戻し作業、遺物の注記、土器洗い。  
2 埋戻し作業、遺物の注記、電源切る。  
3 フェンス用パイプ、出土遺物、食器棚等搬出、水道を止める。  
4 トイレ運搬 マイクロバス移送、2tダンプで木材、石材、水道、ホース等搬出  
6 プレハブ解体、電話の取外し、ユニックで木製品収納水槽を本社へ。  
7 木製品収納水槽ユニックで本社へ移送。

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

### 第1節 遺跡の立地

寺田遺跡が所在する前橋市元総社町は、前橋市役所から西方に約2kmのところにある。当遺跡の南約100mには主要地方道、前橋・安中線があり、さらに南約600mには国道17号線が北東から南西に通っている。この2道の間を二分し前橋・安中線に並行して推定東山道が安中方面へ伸びている。当遺跡は西側に牛池川を挟んで元総社小学校に続く上野国府推定地の東側に隣接する。

この、前橋台地を構成する地層は、上部から表土層、水成ローム層、火山泥流堆積物、砂疊層となっている。火山泥流堆積物により平坦な前橋台地の原面がつくられ、この堆積物により、いたるところに湿潤地が形成された。前橋台地は清單陣場地城では榛名山からの火碎流や土石流により緩斜面形を作り上げているが、概ね平坦な台地面といえる。榛名山麓に源を発する中小河川は東南方向に並走する。寺田遺跡はその一つの牛池川左岸に位置し氾濫原と考えられる。

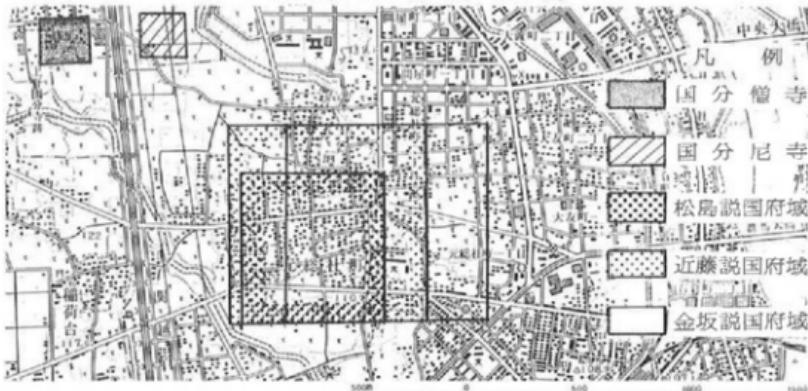
註 (1) 近藤義雄 「前橋の歴史」(古代東山道と群馬駅) 1986年

桐原 健 群馬の遺跡「アズマへの道 アズマからの道」

1985年換乎堂

第1図

推定国府関係図





第2図 市内の地形的区分図

(2) 元総社明神遺跡 I  
(第3回推定国府関係図)

前橋市教育委員会 1982年

(3) 尾崎喜佐雄、新井房夫 他  
前橋市史第1巻 1971年前橋市

(4) 西田健彦、中沢悟 他  
清里陣場遺跡 1982年  
群馬県埋蔵文化財調査事業団

(5) (1)と同じ

## 第2節 歴史的環境

寺田遺跡周辺には、縄文・弥生時代遺跡の報告は数例にとどまり、この時期の解説は、後日の調査報告を待たねばならない。

本遺跡地は、牛池川の氾濫原に出来た低湿地帯に埋蔵された、土器・木製品・種子・石製品及び自生植物と動物の骨等の遺物が收拾された。

この周辺が一躍時代の脚光を浴びるのは古墳時代からである。周辺遺跡について(1)は第2表のとおりである。特記すれば1.5km北東にある玉山古墳は、6世紀前半に造られた全長7.2m、当初円墳形式で構築された前方後円墳で、川原石を用いた積石塚である。北方約3kmに6世紀末の総社二子山古墳が出現する。この古墳は全長9.8.8m両袖型の石室を、前方部、後円部双方に有し、副葬品については文政2年(2)開口時・元景寺住職の記録に詳しい。巨大な輝石安山岩で横穴式両袖型石室をもつ愛宕山古墳、主軸の長さ7.0mの遠見山古墳、また7世紀末の宝塔山古墳、蛇穴山古墳(4)は仏教文化の影響を強く受けている。

宝塔山古墳の南西約800mに法起寺式伽藍配置と考えられている山王庵寺塔心礎(5)がある。この石造技術は宝塔山、蛇穴山両古墳の石室と同系列の加工方法と考え

られており、大化2年(646)詔ニ曰ク、厚葬ヲ戒ムとありながら上野国にあっては宝塔山古墳、蛇穴山古墳等が築かれている。この周辺では仏教文化が古墳文化と併存しながら開花した様子が窺える。

奈良・平安時代になると、当地域は国衙や国分寺の建設とあいまって、古代上野国における政治・経済・宗教・文化的中心地であったことをものがたっている。国府については調査例と諸論文があるが確定するに到っていない。国分寺については統日本紀に見られる上野国関係文書により天平勝宝元年には完成したものと思われる。

註

- |     |                          |   |             |
|-----|--------------------------|---|-------------|
| (1) | 『清里南部遺跡群』                | 前橋市教育委員会  | 1980年       |
|     | 『大八木遺跡』                  | 高崎市教育委員会  | 1981年       |
|     | 『正觀寺遺跡群』(I, II) 高崎市調査報告書 |   | 1979, 1980年 |
|     | 『日高遺跡』                   | 群馬県高崎市日高遺跡の調査、考古学ジャーナル<br>152号 1978 日高遺跡 I, II高崎文化財調査報告書第10-17号 | 1979, 1980年 |
|     | 『小八木遺跡』                  | 小八木遺跡報告書 I, II高崎山文化財調査報告書<br>第8, 15号                            | 1979, 1980年 |
| (2) | 三山古墳                     | 前橋市教育委員会松島栄治  | 1973~74年    |
| (3) | 元景寺文書                    | 『前橋市史』第1巻   | 1971年前橋市    |
| (4) | 『横穴式古墳の研究』               | 尾崎真佐雄   | 1966年       |
| (5) | 山王施寺                     | 『前橋市史』第1巻   | 前橋市         |
| (6) | 尾崎論文                     | 愛宕山、宝塔山、蛇穴山古墳等の巨石を用いた豪華な横穴式石室                                   | 7C第3四半期     |
| (7) | 『日本書記』卷25                | 646年大化2年  |             |
| (8) | 『元総社男神遺跡』I               | 岩田哲男(「野訓府に係る諸論叢」1982年)  |             |

第1表 上野国府に係わる諸論文

著者名	論 文	掲載誌	発表年	國 府 推 定 地
都木 伸作	国府政庁の跡について	上毛及上毛人 第120号	1927	元總社の中央部、通称石神付近を政庁跡とする
近藤 義雄	上野国府の所在地について	史学会報第1回	1947	遺跡、地名、文献、重要遺跡との位置関係の4つの立場から、上野国府の位置を推定し、林倉寺と昌楽寺を結ぶ線を北限とした方8町域とした。
	上野国府について	上毛史学第5号	1954	同上
	上野国府をめぐる地名	史学会報		国府に係わる共通な地名を詳しく考証
	上野国府を巡る古代交通路	伝説第33巻 第2号	1981	これまでの発掘調査の結果から、昌楽寺東の南北に走る溝から西の地が有力な国府推定地となってきた。そこで南北の溝を東の外郭線と考え、その北東の基点を弘和4年1月の発掘地におき、それより8町南の水路が流れる付近まで東の線とし方8町を求めた。
尾崎喜佐雄	国府推定地の発掘調査	前橋市史第1巻	1971	近藤説（伝説）をもとに発掘—それまで考えられていた範囲を西方にすらすことが妥当との結論。元總社小校庭と昌楽寺裏において官衙らしき掘立柱遺構検出。
金坂 清則	上野国府とその付近の東山道及び群馬、佐位駅家について。	交通の歴史地理 (歴史地理学紀要16)	1974	元總社付近の地図の検討から第1回のような推定線を導き出している。
松島 栄治	上 野 国 府	歴史公論10	1976	国分寺の東南隅から東へ6町、南へ6町とったところから、更に東と南へ6町ずつとった方6町を範囲とした。（第1図）菅原城と重なる
峰岸 純夫	東道-東山道の復元-	佐渡郡東村誌	1979	金坂説を西へ3町程ずらし、国衙の外郭線を本丸、二の丸と続く菅原城の内郭と篠塹屋敷、頬下屋敷、出御屋敷、農被屋敷とが接する南北の道路に設定し、国衙の8町プランを牛池川と染谷川の間にさめる。
川原嘉久治	推定上野国府跡地覚え書き試みI	鳥羽遺跡 月報 No.16	1980	古瓦の分布、土居8町を想わせる八丁、正殿跡を想わせる丁ヤ、国衙の存在を想わせる右倉等の地名から菅原城を中心とした地域を想定。

(9) 上野国関係文書、地名類聚録、上野国神名帳、上毛古墳監覧、

上野国支管実錄帳

第2表 周辺遺跡

地図上名	遺跡名	所在地	時期	遺構・遺跡の概要
1	長久保古墳群	榛東村	古墳	円墳・前方後円墳 S51~53年調査
2	清單南部 遺跡群	前橋市 青梨子町	平安	(縄文、平安、中世、江戸) 平安時代の住居と遺物中心
3	総社 二子山古墳	〃 総社町	古墳	全長98.8m前方部後円部に石室があり F P降下前後を示す。
4	愛宕山古墳	〃	〃	横穴式両袖型石室、家型石棺、巨石の壁は輝石安山岩の田石を使用
5	遠見山古墳	〃	〃	主軸の長さ70m墳丘南側には周濠の一部や葺石が認められる。
6	山王庵寺	〃 奈良	奈良	鶴尾、石製根巻石、心礎、縁石の小瓶と皿 伽藍配置は法起寺式
7	村東遺跡	〃	古奈 奈良	古墳時代、奈良時代の住居址と中世末期の墓研堀
8	宝塔山古墳	〃	古墳	5.4m×4.9m高さ12mの方墳、横穴式 石室は切石切組積の両袖型で壁面には漆喰が塗られていた。
9	蛇穴山古墳	〃	〃	3.9m×4.3m高さ5mの方墳、寺院建築の影響が考えられる。全面に漆喰が残っている。
10	上野国分寺	群馬町 東国分	奈良 奈安	741年聖武天皇の詔勅により建立された官守、平将門の乱か源頼朝挙兵の戰火で焼失したものと思われる。近年開発調査により堂塔の様子が明らかになってきた。
11	国分寺 中間地域	〃	〃	奈良から平安時代を中心とする大集落跡 墨書銘土師器
12	国分寺 国分尼寺	〃	〃	僧寺に比べ若干面積は小さく講堂 金堂と共に布目瓦が出土している。
13	関泉極遺跡	前橋市 元総社町	〃	古墳時代の住居跡 奈良、平安時代の溝、中世の溝
14	王山古墳	〃	〃	前方後円墳後円部が先に築かれた遺跡 全長75.6m、FA上に構築
15	寺田遺跡	前橋市元総社町100番地10他5筆	所在する。	

地図上名	遺跡名	所在地	時期	遺構・遺跡の概要
16	元總社明神遺跡	前橋市元總社町	古墳世 中	古墳時代鬼高期の住居址と溝が検出された。
17	正觀寺遺跡	高崎市小八木町正觀寺町	弥生世 中	弥生・古墳・奈良・平安・中世に及ぶ堅穴住居、円墳、溝、井戸等が確認されている。
18	鳥羽遺跡	前橋市元總社町	奈良 江	B軽石の直上に土師質上器一括資料を得る。
19	中尾遺跡	高崎市中尾町	古平 安	古墳時代前中後期の住居、奈良平安時代の住居300軒以上、土師器、須恵器灰釉陶器、鉄器等出土
20	大八木遺跡	高崎市大八木町	繩文 古	繩文時代住居址・埋甕・古式土師住居跡鬼高期住居址等
21	日高遺跡	高崎市日高町	弥生世 中	条里制水田が確認された。
22	前箱田遺跡	前橋市前箱田町	平安 中	耕作状遺構
23	村前遺跡	"箱田町	平安	浅間B軽石下の水田址と畝状遺構
24	五反田遺跡	" "	"	浅間B軽石下の水田址
25	生川遺跡	"南町	古墳 平安	古墳時代～平安時代に及ぶ住居址
26	推定東山道			御布呂遺跡での発掘結果金坂氏の所見により地図上に復元。大化2年(646)五畿七道を整える桐原健アズマへの道、アズマからの道
27	国府推定地	元總社町		第1表に同じ

## 第Ⅲ章 調査の方法

### 第1節 発掘調査の方法と進め方

福祉事務所と市教委の担当者との間で数回にわたって調査の経費、期間、作業の安全等について協議・打ち合せを行い次のとおりとした。

- 1) 発掘調査は保育所建物建設により遺跡の破壊される部分とする。
- 2) 調査は建物の移転及び道路工事進捗にあわせ3段階に分け第1調査区が終了後第2調査区の排土で埋戻し、第2調査区は第3調査区の排土で埋戻し最後に第1調査区の排土で第3調査区を埋戻すことで調査に入った。

以上、調査は残土の1次ストックや、家屋の移転の遅延、道路建設工事との調整などの問題や、元来低湿地であり、掘り下げた調査区は湧水と雨期と雷雨時の出水により、終始水との戦で厳しい作業となった。

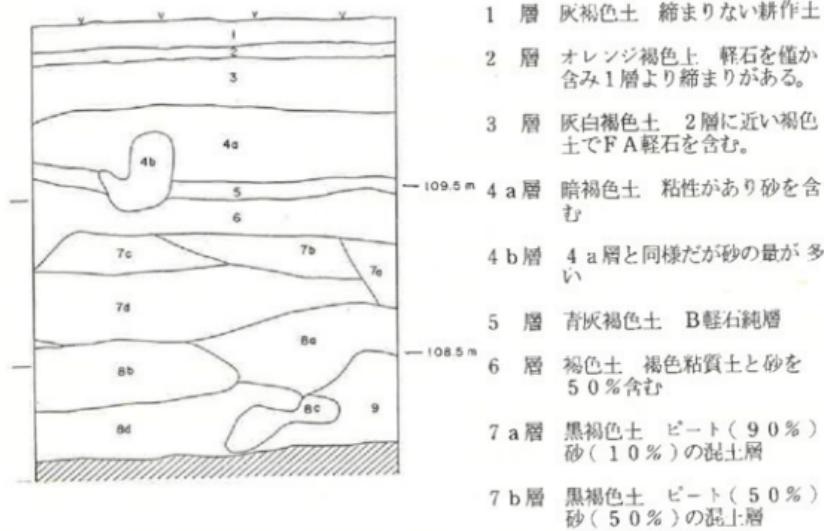
調査は6月4日に着手し、座標 F-4 グリット Y軸-70.878m X軸4.2782m F-8 グリット Y軸-70.858m X軸 4.2782m を基準軸とした。  
3調査区を網羅できる北西隅を基点とし南北軸をアルファベット文字、東西軸をアラビア数字で表わし、グリット名は交点から南へ4.0m、東へ4.0mの区域を示すこととした。

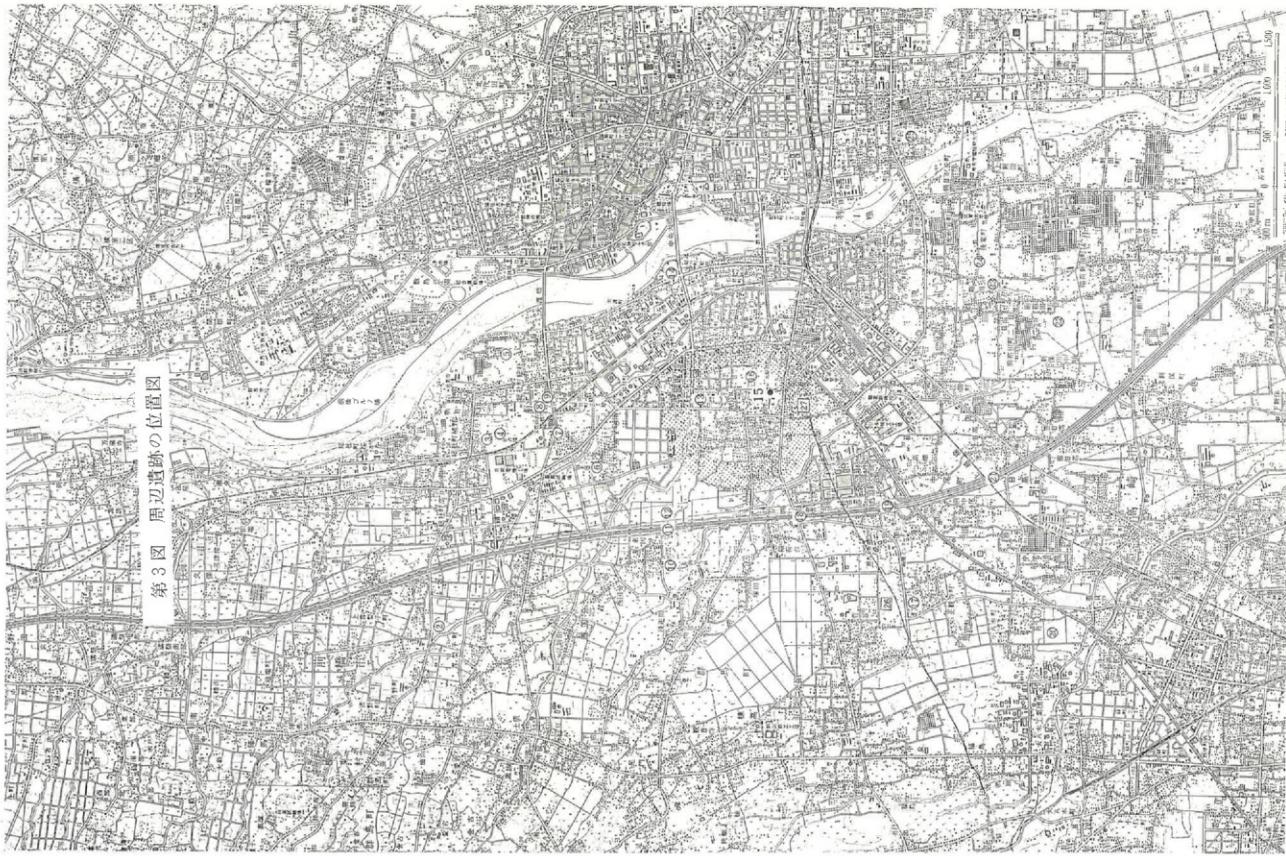
### 第2節 地形及び標準土層断面について

地形は総社神社と元総社小学校は一段高い所にあり、その東側を牛池川が南流している。比高差は、およそ2~3mである。牛池川左岸から当遺跡までは低地である。C-10グリットとF-10グリットを結ぶ線上で急勾配に西へ傾斜している事から、この間の地域は低湿地であり、かつては牛池川の遊水池の役割をはたしたものと考えられる。遺構としてはこの遺跡の東端に大型の溝が南北に走っている事が確認された。(第8図)

第4図 標準土層断面図

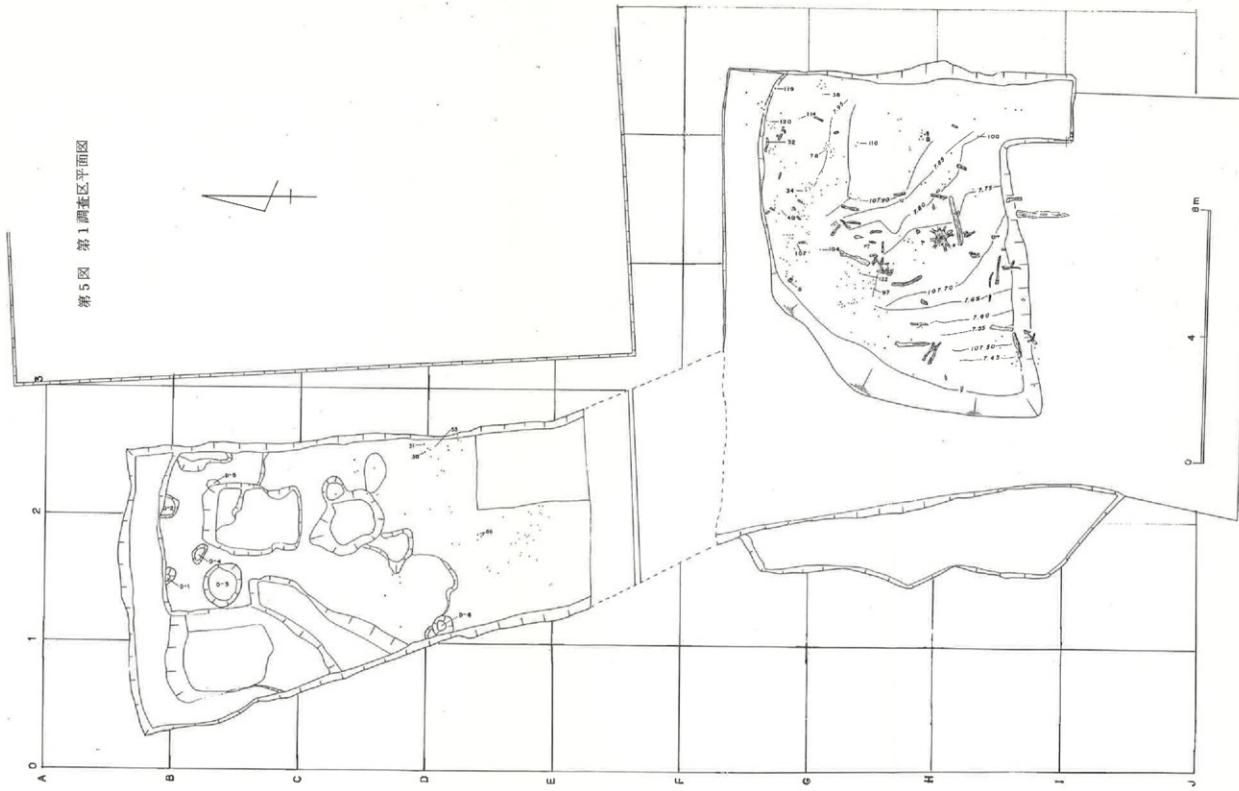
C-6 グリット付近





第3図 周辺遺跡の位置図

第5図 第1調査区平面図



## 第Ⅳ章 検出された遺構と遺物

### 第1節 第1調査区の遺構と遺物

D-1グリット～D-2グリットに炭化物と黒色灰層が集中して出土し付近に平安時代の土器も見られたが遺構としての確証は得られなかった。

F-2より南の地域ではG-5グリットからH-4グリットを経て、I-3方向に流路跡が確認された。

それ以前には、浅間のC軽石堆積後平安時代のB軽石疊下迄の期間牛池川の河川の変流により低湿地であった事を物語っている。

第5図に示されているようにD-1、D-2、D-3、D-4土坑は砂層の上に褐色粘質土が堆積し、この褐色土を掘り込んで4ヶ所の土坑が確認された。

この土坑の用途は不明であるが、この面が生活面として使用可能であった事を示す。

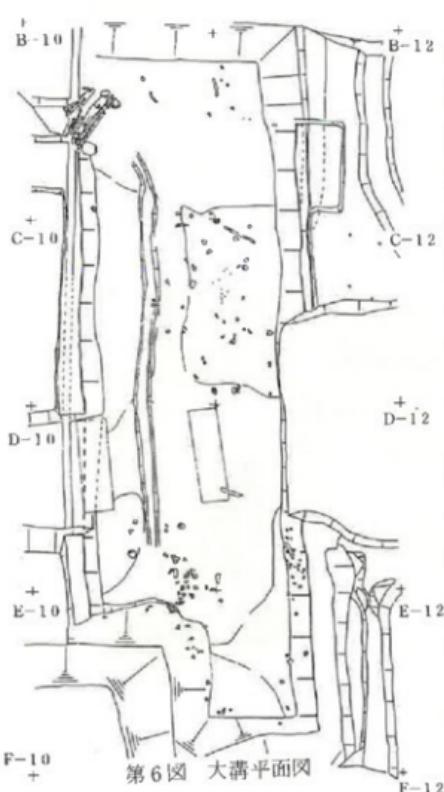
出土遺物としては、朱塗り椀（第4表 №.8）、小瓶（第4表 №.30）、青磁の塊（第4表 №.31）が出土したことは特筆されよう。



第1調査区、A-O～A-1グリット方向を望む

## 第2節 第2調査区の遺構

第2調査区中央部東側よりにN-1°-Eの方向性をもって南北に走行し調査区域外に延びる大溝が検出された。この溝は(第6図)C-10、11 D-10, 11 E-10, 11 F-10, 11 グリット内に位置する。(区画整理以前使用されていていた道路の直下に位置する)土層断面からFA(榛名山二ツ岳、6世紀前半)<sup>(1)</sup>降下後開削され浅間B軽石(天仁元年、1108年)<sup>(2)</sup>降下以前迄使用可能であったと考えられる。



この溝の北壁付近における上幅472cm下幅395cm深さ153cm中央部で上幅529cm下幅408cm深さ142cmを測る。断面形を見ると立ち上がりは北壁付近で67°中央部64°の逆台形を呈する。溝の底から出土した布目瓦須恵器上彫器等から平安時代中頃まで溝として利用されていたものと思われる。そしてB軽石降下後に埋没したものと考えられる。

この大溝北西隅には支水路との合流施設が検出された。覆土は24層に細分ができる。

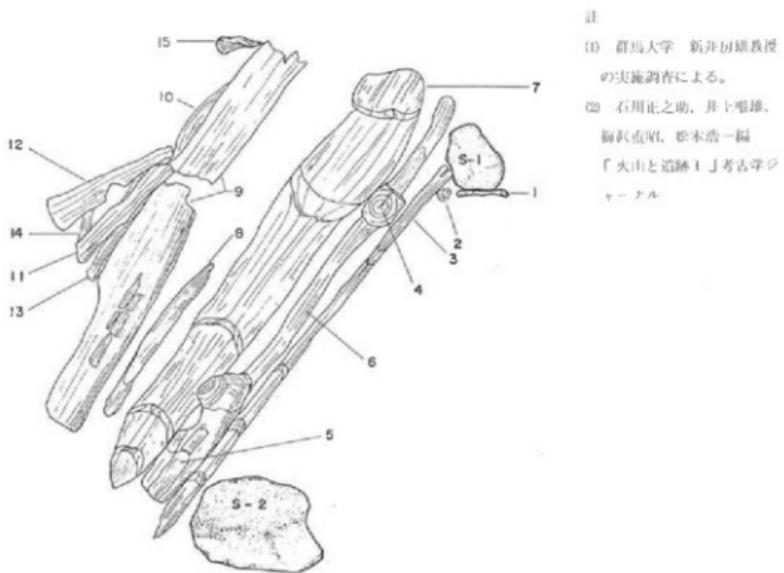
第9図1a~2b層は耕作土であり7層はB軽石の2次堆積層である。規模は縮小しても依然として流路であった。又同図14層はFA泥流、第15層はFAである事からFA降下後大溝は開削されたことが窺われる。

これは昭和58年2月～3月にかけて調査された閑泉遺跡の1号溝跡の計測値「上幅は6.5～7.0m下幅3.24m深さは2mを超すものと思われる」と報告されているものと比較して見ることが出来る。

前述の大溝の構築以前に造られた水口遺構（第7図）には、№1～14の板材が敷詰められ、№3、№7の板材は、中央部が凹状を呈し特殊な用途を示すものと思われる。2個の石で板を止めている。

№1は勘刃の木部でS-1を支えるがごとく打込まれていた。

№15の木杭は、№9の板を止めるために打ち込まれている。



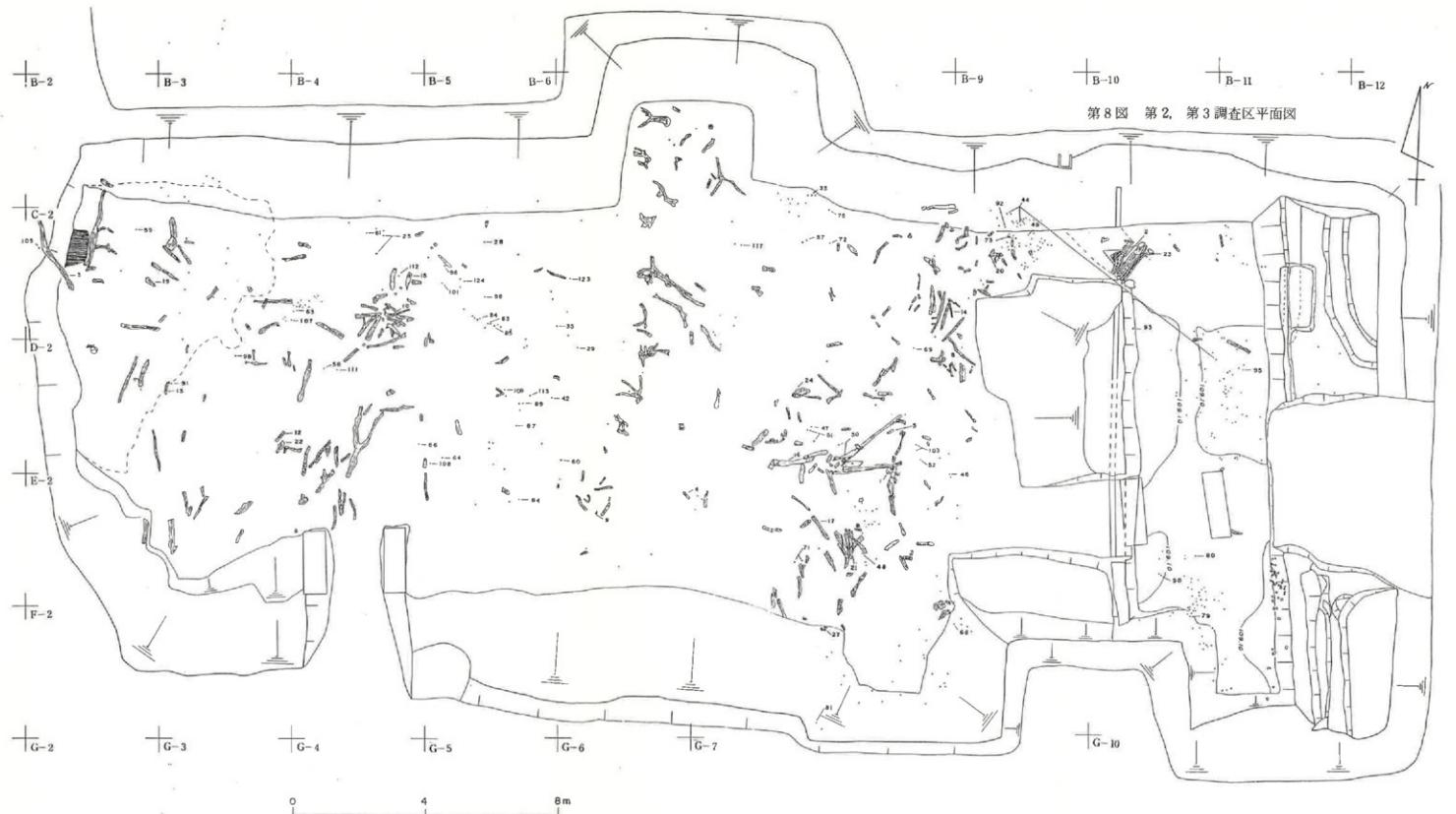
第7図 水口遺構平面図

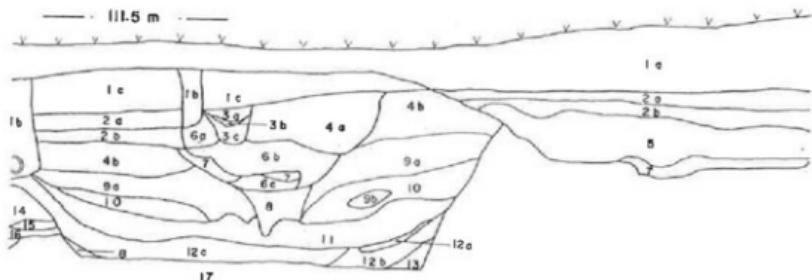
この大溝の左岸上には小溝があり、流路を東に変えるべく設けた小杭が4本確認された。（第8図 D-11グリット）

小杭は直径3～5cm長さ3～15cmの木杭であった。



第8図 第2, 第3調査区平面図





第9図 大溝土層断面図

- 1 a 層 盛土
- 1 b 層 砂石を含むカクラン層
- 1 c 層 灰白褐色土 粘性が強い
- 2 a 層 耕作土 水田耕作土
- 2 b 層 × 水田底面 オレンジ褐色土
- 3 a 層 褐色土層
- 3 b 層 白色粘土層
- 3 c 層 黒褐色粘質土層
- 4 a 層 灰白色粘質土を多量に含む褐色土層
- 4 b 層 オレンジ褐色に近い灰白褐色土層( 砂石を含む )
- 5 層 炭化物を含む暗褐色土
- 6 a 層 褐色粘質土層
- 6 b 層 F A 砂石を含む褐色土層( 5 ~ 10 % )
- 6 c 層 × ( 10 ~ 20 % )
- 7 層 B 砂石の2次堆積層
- 8 層 褐色砂層と黒褐色粘質土の島状層( 路面 )
- 9 a 層 F A 砂石を含む黒褐色土層( 10 ~ 20 % )
- 9 b 層 褐色砂層
- 10 層 青褐色砂と粘土の混土層
- 11 層 黑褐色粘質土層
- 12 a 層 12 b 層よりも黒色の粘質土を多量に含む黄褐色砂層
- 12 b 層 黄褐色粘土粒を含む黄褐色砂層
- 12 c 層 黑青灰色粘土層( F A の青灰色を呈するものと黒色粘質土と地川の白色粘土粒を含む )
- 13 層 白色粘土を含む黄褐色砂質層 粘性が強い
- 14 層 F A 脱硫褐色土
- 15 層 F A 純層
- 16 層 黒色ビート層
- 17 層 黄灰白色砂岩層 地山

第3表 大溝出土遺物観察表

出土位置	種類	標高	色調	器形・成形の特徴	遺存・備考
C-10-1 a	須恵	110.130	灰白	甕の胴部破片、外面平行叩き目文(にぶい模様) 内面同心円叩き目文(灰白)	少量
〃 2	須恵	110.235	灰白	白磁の破片、内外面削が掛かっている。	少量
C-10-1	土器	109.850		圓版番号9-3による。	
〃 2	須恵 盤	109.225	灰白	体部は浅く口縁部は僅かに外反する。外面同軸ナデ、高台は直立して短い。内面口縁部に擦着に灰釉が見られる。	口縁部～底部少量
〃 3	須恵 盖	109.165	紫灰	ロクロ整形。外面同軸ナデ。内側に「かえり」を持つ。	口縁部～底部少量
C-11-1 a	瓦	110.310	暗紫灰	平瓦の破片	少量
〃 2	瓦	110.035	灰白	平瓦の破片凹面布目窓にヘラ書き文有り。	少量
〃 3	瓦	110.150	灰	平瓦の破片凹面布目、凸面に模様窓あり。	少量
C-11-1 b	須恵	109.310	灰白	甕の胴部外面へラナデ炭化物の付着頗著	少量
〃 2	土器	109.300	明褐	甕の体部。外面へラ削り後ナデ、内面ナデ	体下部少量
〃 3	須恵	109.295	黒	甕の胴部の破片。	少量
〃 4	須恵	109.285	灰	甕の口縁から体部外面同軸ナデ指文有り。	
〃 5	土器 杯	109.310	橙	外縁を持つ杯の体部破片。	底部少量
〃 6	土器	110.350	にぶい模	甕の胴部破片。磨耗が頗るしい。	少量
〃 S-1	石	H110.240 L110220	緑灰	疑片岩	
D-10-1	須恵	109.245	青灰	甕高台部。底部糸切後高台を貼り付けた痕有り。同軸ナデ拭拭。	台部 1/2残
〃 2	須恵	109.265	灰白	高台付塊。内外面同軸ナデ。高台は逆台形を呈す	底部 1/4残
〃 3	瓦	109.915	灰白	布目平瓦破片	少量
〃 4	瓦	109.680	灰白	布目平瓦破片。端をヘラナデ部分的に布目をすり落す。	少量
〃 5	瓦	109.645	圓版44による。C-9-4,C-9-5,C-9-6,C-9-11D-10-5	はく完形	
〃 6	瓦	109.850	灰白	布目をすり落す。端ヘラナデ、叩き文有り。	少量
〃 7	須恵	109.497	青灰	甕底下部から底部の一部。外面鐵雜痕内部指ナデ	胴下部少量
〃 8	須恵壺	109.250	灰	高台付塊の底部破片。回転糸切後高台貼り付け、内外面同軸ナデ。底部中央が最も薄い。	底部 1/5残
〃 9	土器 杯	109.290	橙	外縁を持つ杯の体部から口縁部磨耗が頗しく整形方法は不明。(鬼高Ⅱ)	口縁少量

出 土 位 置	種 類	標 高	色 調	器 形・成 形 の 特 徴	遺存・備考
D-10-10	須恵	109.370	黒	羽墨の口縁部。内外面回転ナデ黒色処理。	口縁少量
〃 11	土器 杯	109.530	にぶい褐	体部は内窓し口縁部は外反する。杯の口縁部	口辺部少量
〃 12	瓦	109.620	明赤灰	焼き締った布目瓦。凹面の布目の一部を指す り酒す。	少量
〃 13	土器 杯	109.625	にぶい褐	杯の体部から口縁部。外面口唇部に縫あり。内窓 しながら立ち上った体部は口縁部で内斬する。	口辺部少量
〃 14	須恵	109.365	暗赤灰	通脇部破片。外面ヘラ削り後ナデ、内面ナデ 黒色を呈す。	少量
〃 15	土器	109.180	にぶい褐	壇の副部破片。外側ヘラ削り、内面ナデ	少量
〃 16	須恵	109.220	黒	杯の底部。外曲ヘラ削り、内面ナデ	少量
〃 17	須恵	109.230	にぶい黄橙	壇の通脇部。外曲ヘラ削り後ナデ、内面ヘラ削り	少量
〃 18	須恵	109.230	灰白	壇の副部。外曲ヘラ削り、内面ナデ	少量
〃 19	須恵	109.185	灰白	杯の底部。内外面回転ナデ底部外面は削て不明	底部少量
D-11-1 b	須恵壷	109.350	オリーブ黒	高台付塊。底部から体部、底部に糸切掛高台を貼 付け、内外面墨色処理、内外面回転ナデ、内面底 部中央が窓れ。	底部 2/3残
〃 3	杯	110.025		回収番号 9-5 による	
〃 4	土器 杯	110.010	明褐	粗い砂粒を多量に含む。回転糸切痕、内外面回転 ナデ体部は内窓しながら立ち上り、口縁部は直 線的に外反する。	1/2残
〃 5	須恵 壺	109.280	灰	外面格子状叩き目痕刷り消し。	少量
〃 6	須恵 杯	109.275	灰白	底部は回転糸切り痕明顯。薄手、内外面回転ナデ 中央部が窓み最も薄い。	体下部底部 1/3残
〃 7	須恵	109.290	灰白	杯蓋の破片。外向口辺に黒色処理が見られる。 内外面回転ナデ	少量
〃 8	須恵	109.290	灰白	杯の口縁部。外面指押さえ、内面は黒色処理が見 られる。	口縁部少量
〃 9	瓦	109.315	外 暗赤灰 内 暗灰	凸面に格子目口文を有する。凹面は布目 をヘラによりスリ滑す。	少量
〃 11	須恵	110.070	外 黒 内 脱灰	壇の副部。外曲上脱火物の付着により黒色を呈す る。	少量
〃 12	土器 杯	110.015	灰黄褐	体部から口縁部の一端。内外面回転ナデ、体部は 内窓しながら口縁部に至る。	口縁少量
〃 13	須恵	110.135	外 黒	内灰白 11と接合	少量
〃 14	須恵	109.290	褐灰	壇の副部。外面ヘラ削り、内面ナデ	少量
〃 15	須恵 壺	109.260	黑褐	壇部から壇背「く」の字状を呈す。輪積痕を残す 内外曲ヘラナデ	口、胴上部 1/4
〃 16	土器 杯	109.300	にぶい黄橙	底部を厚く残し、粗い糸による回転糸切痕。 内外面回転ナデ	底部 1/5
〃 17	土器 杯	109.320	にぶい褐	口縁部から体部の破片で磨滅が頗しく 整形方法は不明。	口縁少量

出 土 位 置	種 類	標 高	色 調	器 形・成 形 の 特 徴	遺存・備考
D-II-18b	須恵 壺	109.310	灰白	底部の一部高台の貼り付け部分が剥離する。内外面回転ナデ	底面 1/4
" 19	須恵 杯	109.280	灰	体部破片。内外面回転ナデ	少量
" 20	土師	109.225	外にぶい褐色 内 灰白	杯の体部か、磨耗が頗しく不明。	少量
" 21	須恵	109.310	外 黒褐 内 灰白	壺の胴部の破片。外面黒色処理。横ナデ	少量
" 22	土師	109.215	にぶい赤褐色	壺型土器の頭部。外面ヘラ削り、内面ナデが見られる。	口縁 少量
" 23	土師	109.215	にぶい橙	杯の破片。磨耗が頗しく不明。	少量
" 24	須恵	109.260	暗青灰	杯の体部。内外面回転ナデ	少量
" 25	土師 杯	109.285	明赤褐	杯の口縁部。体部の厚みが口縁部で薄くなり内傾する。	口縁 少量
" 27	土師 杯	109.290	赤褐	杯の口縁部。磨耗が頗しい。	口縁 少量
" 28	須恵 杯	109.300	灰	杯の口縁部。内外面回転ナデ、一部灰化あり	口縁 少量
" 31	土師 杯	109.255	にぶい褐	杯口縁部。体部は内窪し縁部で直立気味に内傾する。	口縁 少量
" 32	須恵	109.260	暗赤灰	壺の胴部。内外面回転ナデ	少量
" 33	土師 杯	109.290	にぶい褐	杯の口縁部。内外面回転ナデ	口縁 少量
" 34	土師 杯	109.250	にぶい赤褐色	杯の体部から底部。底部外側には謀し痕有り。内面ヘラナデ後ヘラ研磨が見られる。	体下部 1/5
" 35	瓦	110.220	灰	平瓦。凹面布目を帯状にヘラにて削り消す。	少量
E-II-1	須恵 盆	109.600		圓版番号 80 による。	完形
" 2	土師 塊	109.660		圓版番号 90 による。	台部一部欠
" 3	土師 壺	109.600	灰白	壺の胴部の破片。	壺 少量
" 4	土師 杯	109.615	明赤褐	底部から体部の一部。外面ヘラ削り内外面回転ナデ	少量
" 5	瓦	109.345	青灰	半瓦の一端。布目痕有り。	
" 6	瓦	109.300	青灰	半瓦の一端。	
" 7	羽釜	109.610	淡赤褐色	羽釜の鍋の一部。	
" 8	蓋	109.610	灰	ロクロ整形。外面状態、黒色斑点の発泡有り。内面回転ナデ、口唇部は直に折れる。	少量
" 9	須恵 壺	109.610	外 褐灰 内 灰白	羽釜の胴部上位の破片。外面炭化物の付着が目立つ。内面腐食が目立つ。	
" 10	須恵 瓶	109.600	同上	上記(E-II-1-9)と接合	胴部 少量
" 11	羽釜	109.285	外 灰 内 暗灰	9,10の鍋の部分	口縁

出 土 位 置	種 類	標 高	色 調	器 形・成 形 の 特 徴	遺存・備考
E-10-12b	蓋	109.280	外 灰白 内 黑	ロクロ整形。内側に灰斑有り。口唇部がくびれ「かえり」の貼り付け。	少量
〃 13	須恵 杯	109.605	灰白	口縁部の破片。	口縁 少量
〃 14	須恵 杯	109.605	にぶい 黄褐色	粗雑な整形で口縁部が一定でない。外面回転ナデ 内面回転ナデの旋紋が顯著に見られる。	口辺部 1/3
〃 15	須恵 杯	109.605	にぶい 黄褐色	高台付塊の底部。 外面回転糸切り有り。 内面は腐食され不明。	底 少量
〃 16	須恵 杯	109.600	にぶい 黄褐色	(E-10-14)と接合。	
〃 17	須恵 杯	109.635	灰黄	羽釜の裏部。内側の腐食が目立つ。9.10.11. と同一個体と思われる。	
〃 18	須恵 杯	109.605	灰白	杯の休謫の破片。内外面回転ナデ、内面に黒色処理が見られる。	
〃 19	須恵 杯	109.595	灰白	高台付塊の底部から。 体部回転糸切り後高台貼り付け、内面には残る付着が見られる。	1/3 残
F-10-1 b	土器	109.890	赤褐	甕の胴部。外面ヘラ削り。内面粗いナデ。	胴部 少量
〃 2	土器	109.800	外 灰白 内 灰	杯の底部。肥耗が頗しく整形については不明	底部 少量
〃 3	須恵 蓋	109.835	灰白	杯、蓋。内外面回転ナデ、灰釉	1/4 残
〃 6	瓦	109.815	赤褐	布目的一部分にヘラで割り落しが見られ破損頗しい。	
〃 7	須恵 杯	109.810	黄灰	高台付塊のつい 武部から体部。内外面ナデ、高台は貼り付け部より剥離。	体部 1/6 残
〃 8	瓦	109.845	褐灰	凸面のみ剥離せるもの、ヘラ削り痕が見られる。	少量
〃 9	土器 甕	109.835	外褐、内に ぶい 黄褐色	甕の底部。厚さ1.8cm砂粒を多量に含む。外面ヘラ削り、内面ナデ。	底部 1/3 残
〃 10	須恵 杯	109.605	灰黄	高台付塊、底部から体部高台部は剥離、内外面回転ナデ。	口辺部 1/5
〃 11	瓦	109.805	外 明赤灰 内 灰白	凸面ヘラ削り、凹面布目、布の織き目が見られる	少量
〃 12	須恵 杯	109.660	暗灰	大形塊の窓底。内外面ナデ。	少量
〃 13	須恵 杯	109.835	灰白	高台付塊。 内外面回転ナデ、糸切り後長い高台を貼り付け良くナデで糸切り痕を消す。 内面吹泡崩けあり。 中央部が最も薄い。	体下部～ 台部 1/2
〃 14	須恵 杯	109.635	灰白	高台付塊。 ヘラ切り後太い高台貼り付け、内外面粗いナデ、底部中央盛り上がる。	右部 少量 底部 1/2
〃 15	瓦	109.780	灰白	凸面と端部をヘラナデ、凹面布目を刷状の物で斜めにすり消す。	少量
〃 16	土器 甕	109.770	外にぶい 橙 内暗褐灰	甕の胴下部。内外面ナデ	胴部 少量
〃 17	土器 甕	109.895	赤褐	杯体部破片。朱が塗られている。	少量

出土位置	種類	標高	色調	器形・成形の特徴	遺存・備考
F-10-18b	杯	109.850	にぶい赤褐	杯体部から口縁部、内側して立ち上がる体部は口唇部で僅か内傾する。	口辺部少量
" 19	須恵	109.840	外灰 内灰白	高台付塊の底、底部破片。 内外面回転ナデ痕痕。	底部 少量
" 20	土器	109.845	外にぶい赤褐 内褐色	塊の体部から口縁部。体部は内側して立ち上がり 口縁部は「く」字状に外反する。内面黒色處理。	口縁 少量
" 21	土器	109.780	明赤褐	杯の体部小破片。	少量
" 22	須恵	109.605	灰白	高台付塊の底部と高台部。内外面回転ナチ、施釉 のタレが底部に及んでいる。	台部ほぼ完
" 23	須恵	109.595	浅黄 磁	高台付塊。体部及び高台部、内外面回転ナチ、 内側した体部は口縁部で外反する。	体・台1/4
" 24	土器	109.640	外にぶい褐 内 黒	圓版番号7号による。	体下部・右部 完
25	土器	109.620	にぶい赤褐	塊の頭部から口縁部。口縁部は直線的に外傾し頭 部は「コ」字状を呈す。脇部はへラ削り、内面と 口縁部はナヂ。	口縁 7号
" 26	土器	109.590	外 深褐色 内 灰白	塊の頭部。最上位で外面は煙で黒色になってしまい、 指ナヂ痕を明瞭に残す。	少量
" 27	須恵	109.620	灰白	塊の頭部。外面は平行叩き目文をスリ消し。 内面は同心円叩き目文を僅かスリ消している。	少量
" 28	須恵	109.630	灰白	人形彫の外表面は格子目叩き文、内面は同心円叩き 目文が施文され。叩き文の凹面をナヂしている。	少量
F-1)-1	土器	109.860	外にぶい赤 内明赤褐	口縁の大きな彫の口縁部。彫部は鋭く「く」字状 に屈曲し大きく外反する。口縁部は外側に縁を作 って小さく直立する。成形跡は丁寧で施ナヂが施 されている。土浦遺跡、2群上層の5類に該当す るものと思われる。	口縁 7号
" 2	土器	109.805	橙	塊の頭部。「コ」字状を呈す小破片。	少量
" 3	須恵	109.815	灰白	外面ナチ、内面には同心円叩き文有り。	少量

### 第3節 第3調査区の遺構

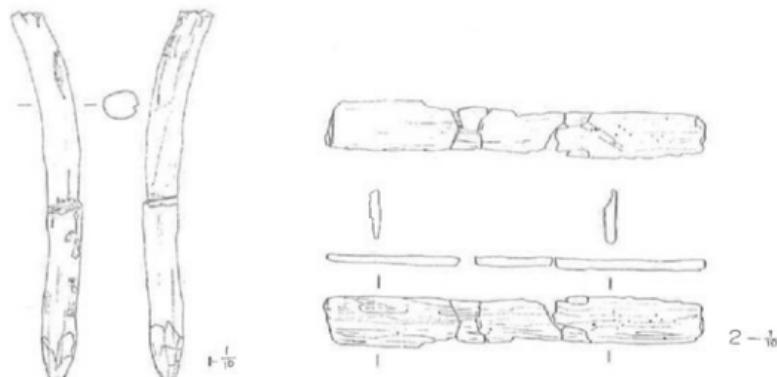
この地域では、遺構は検出されなかった。B - 6, 7 C - 6, 7 D - 6, 7 E - 6, 7 グリットに及ぶ河川の跡が確認された。この右岸には柳10株が検出され、柳の株列は第1調査区のH - 4 グリットでも確認されている。

(第5図 第8図参照)

図版2

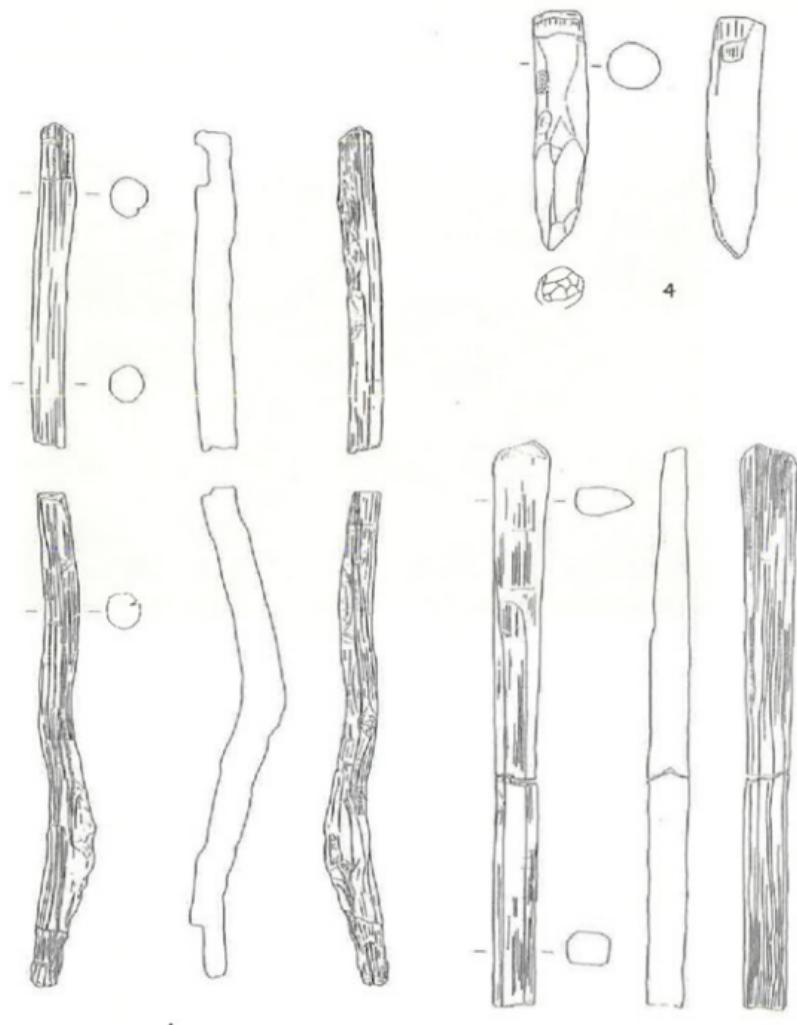


第3調査区作業風景



第10図 木製品実測図

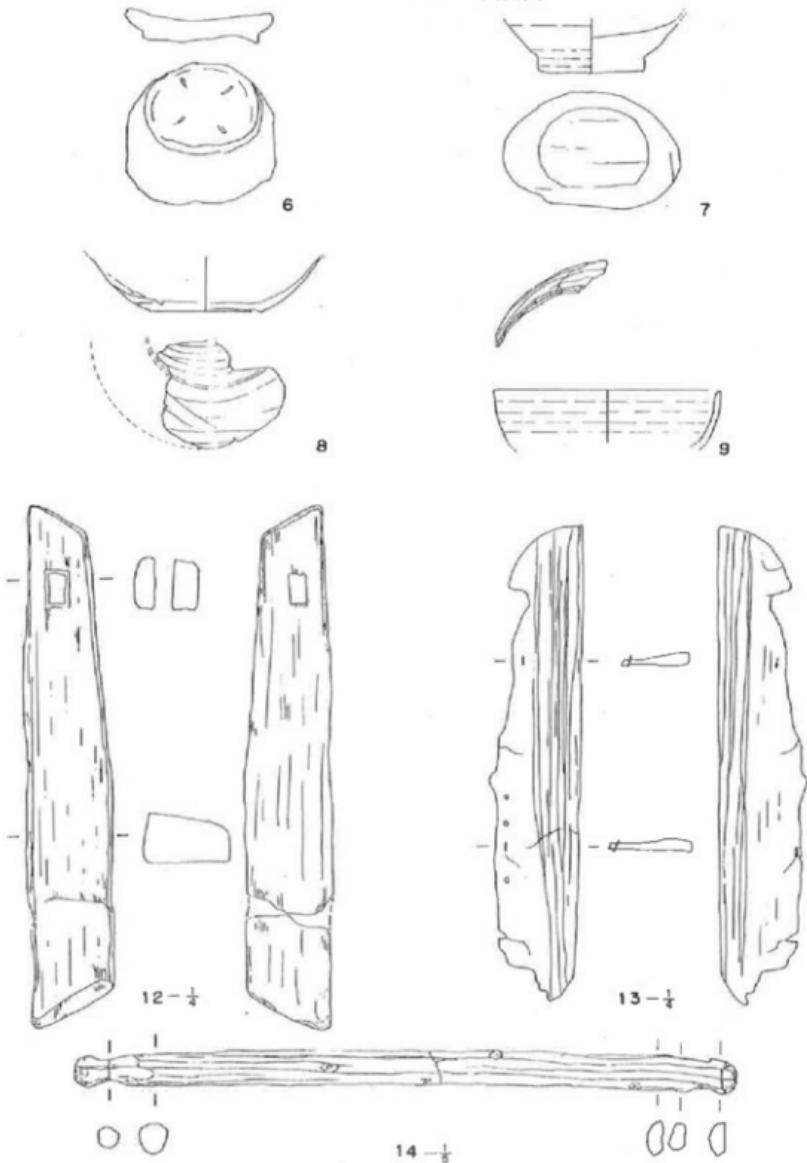
第11図 木製品実測図



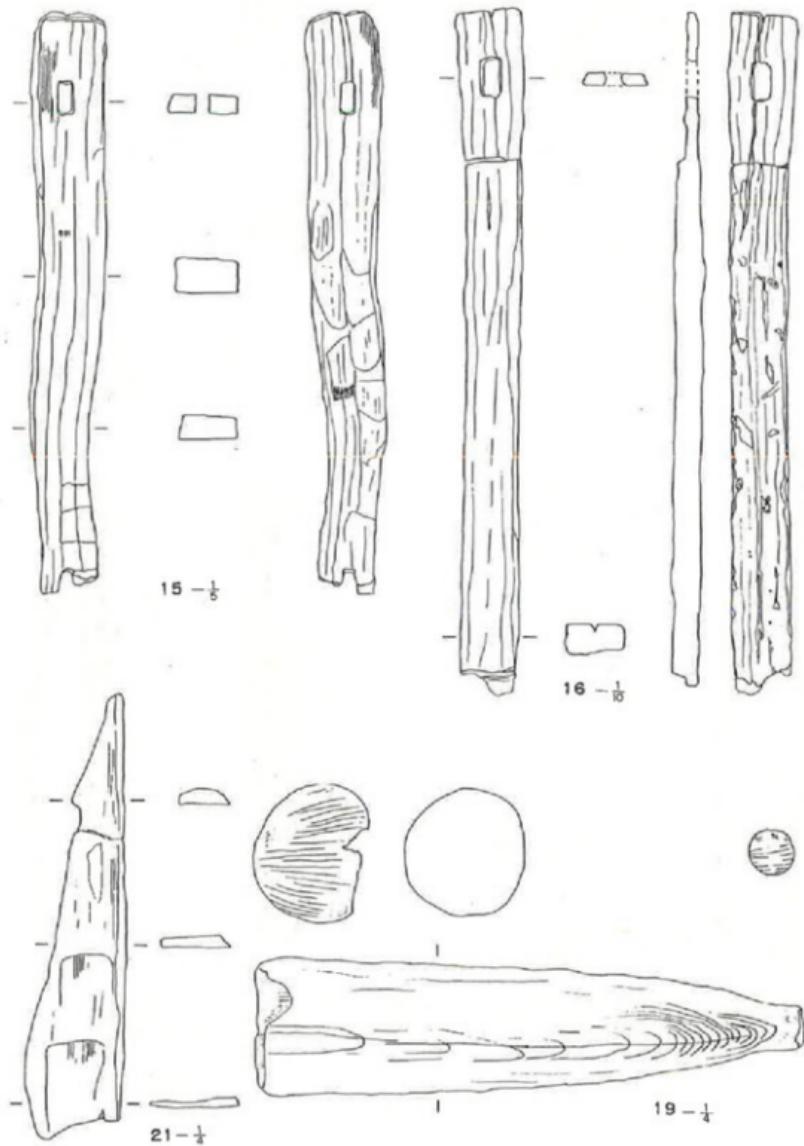
$2 - \frac{1}{10}$

5

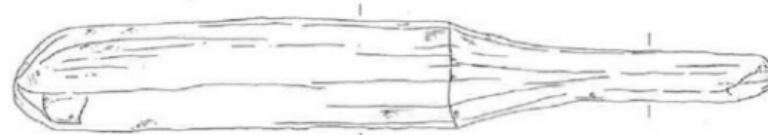
第12図 梗と木製品実測図



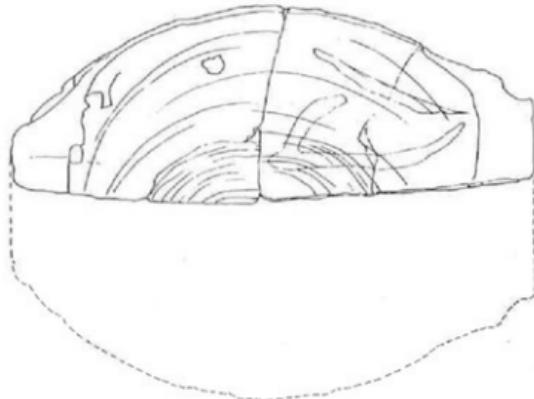
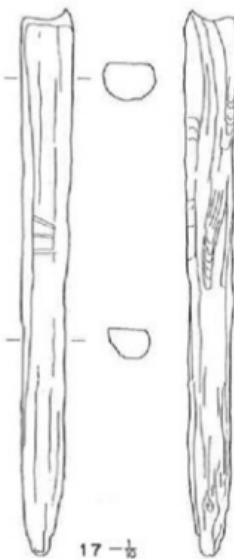
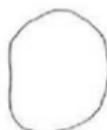
第13図 木製品実測図



第14図 木製品実測図

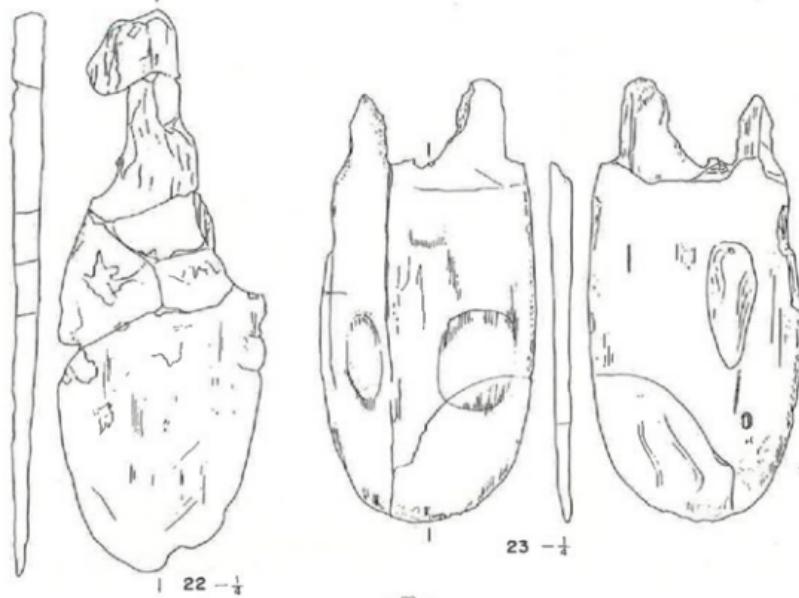
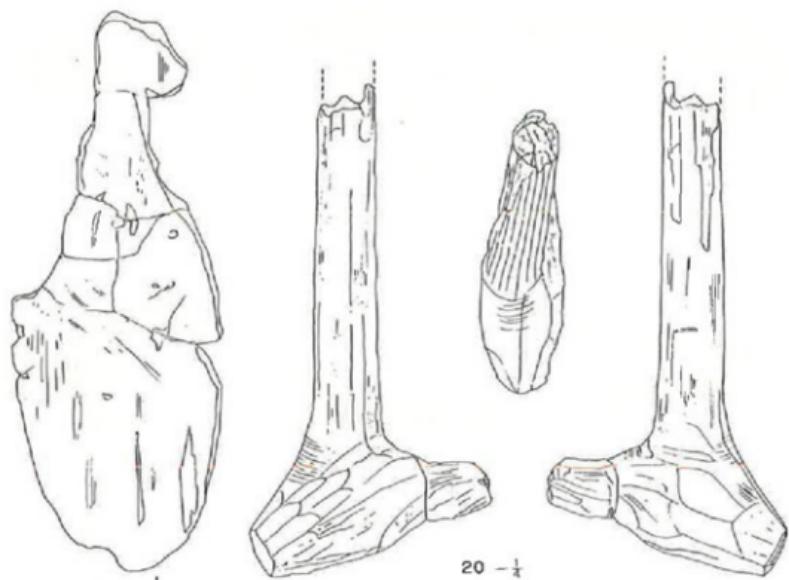


18 -  $\frac{1}{4}$

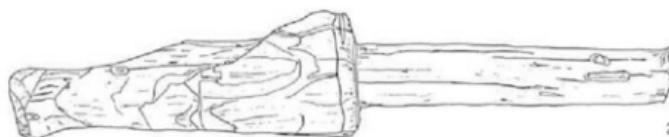
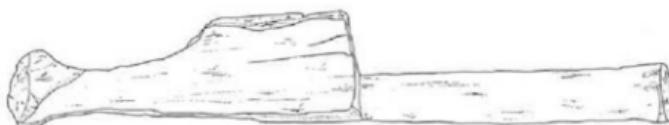


24 -  $\frac{1}{2}$

第15図 木製品実測図



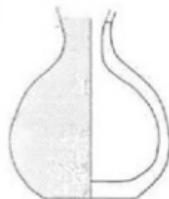
第16図 出土銭拓本・木製品・小型土器・瓦実測図



27-+



31



30



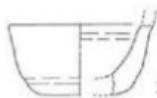
29



28



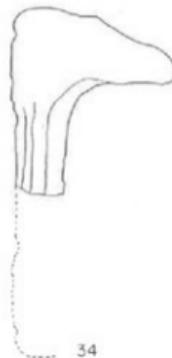
33-1



33-1



32-1



34



35

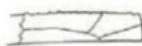


36.



37

第17図 特殊遺物・瓦実測図



38



40



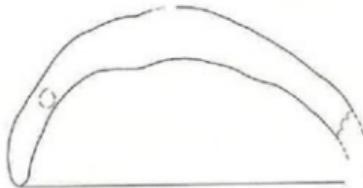
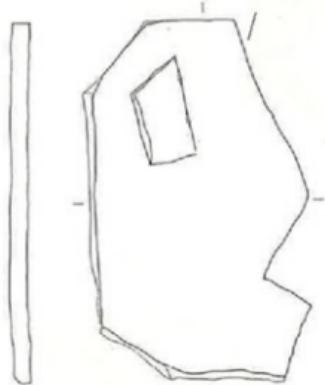
42



41



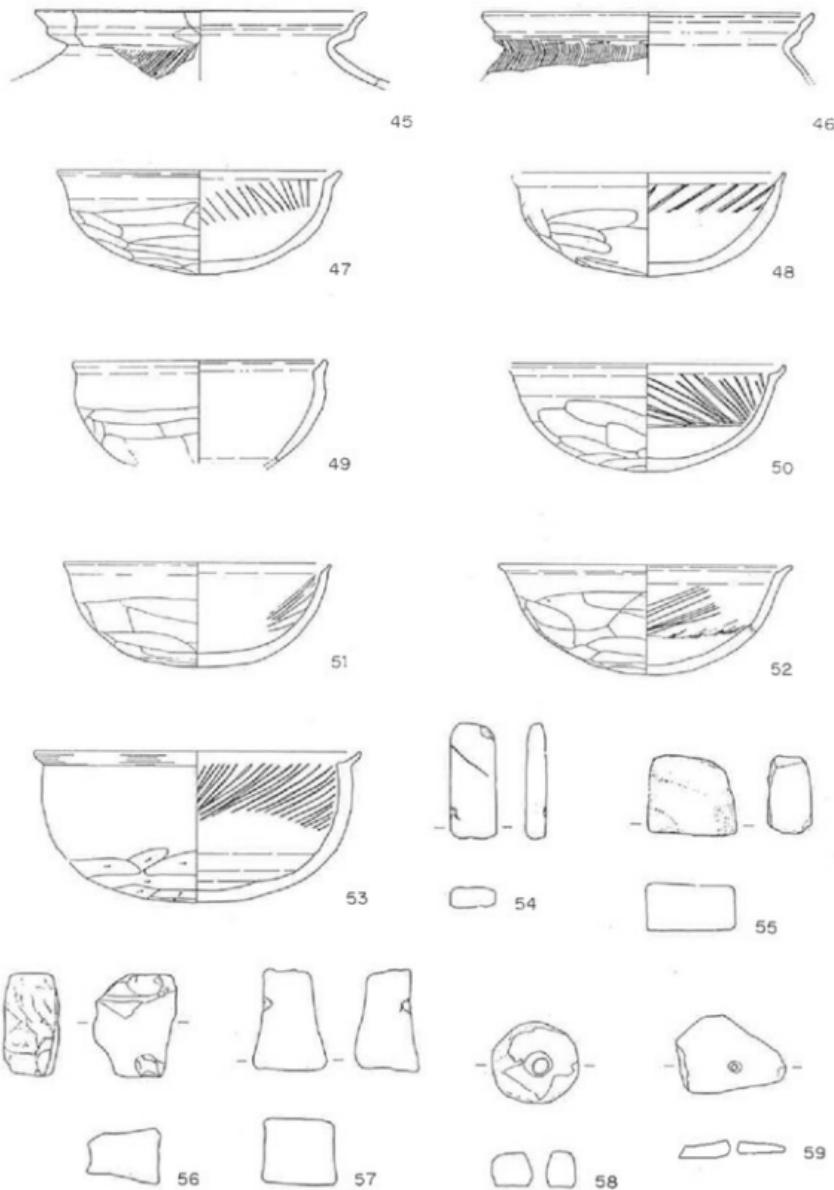
43



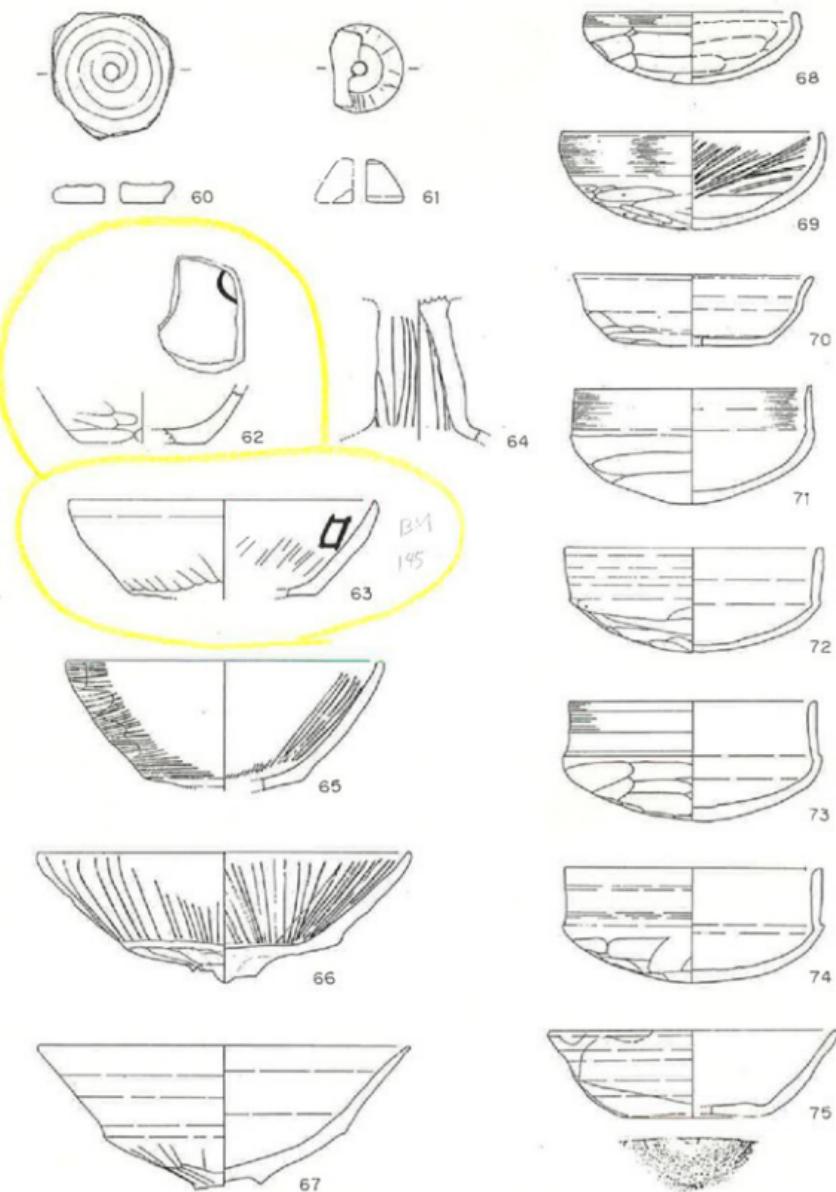
44-1



第18図 瓢・杯・砾石実測図



第19図 紡錘車・杯・高杯実測図



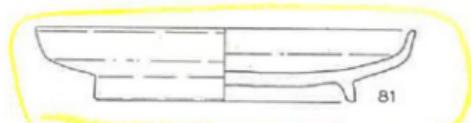
第20図 須恵器杯・皿・高台付塊実測図



79



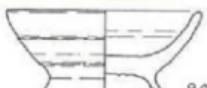
80



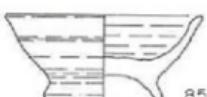
81



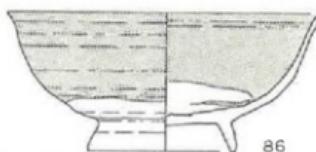
83



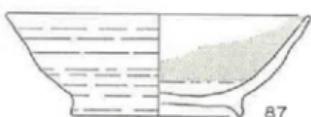
84



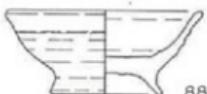
85



86



87

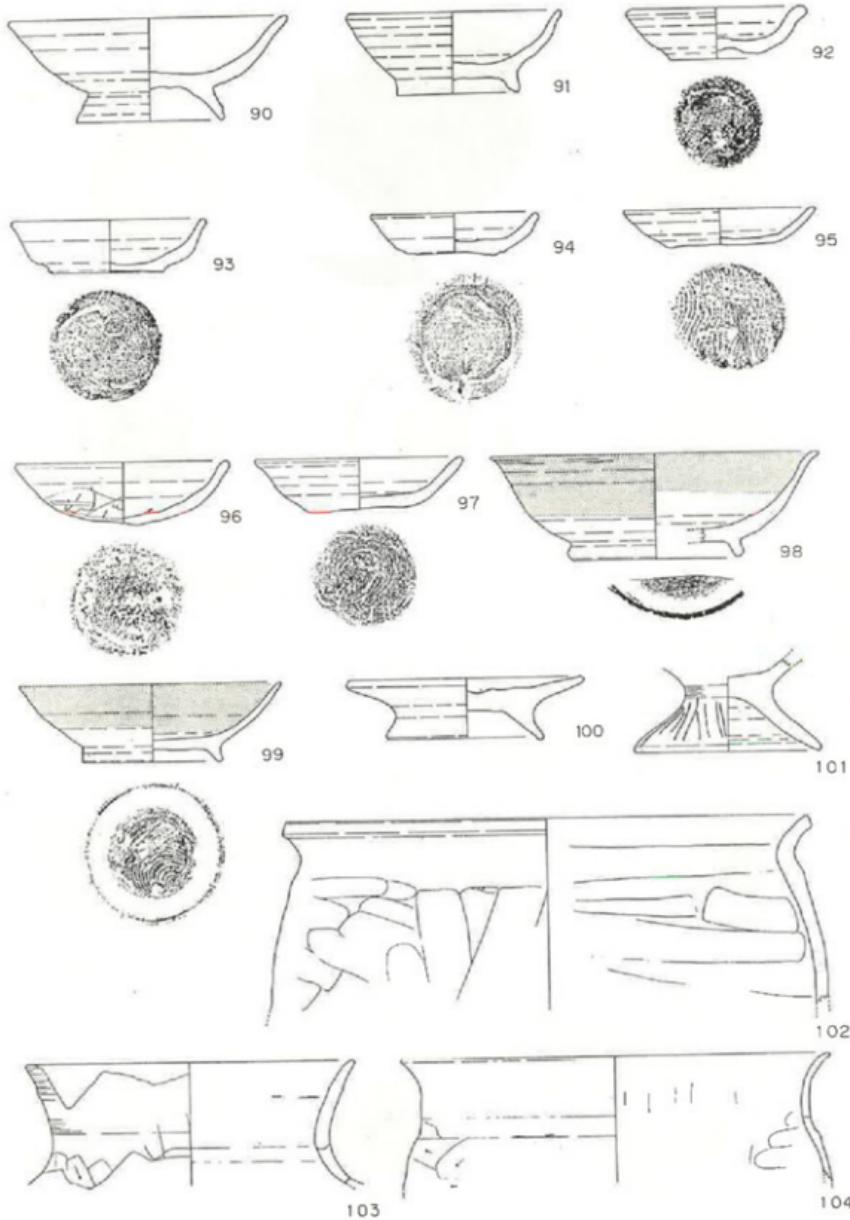


88

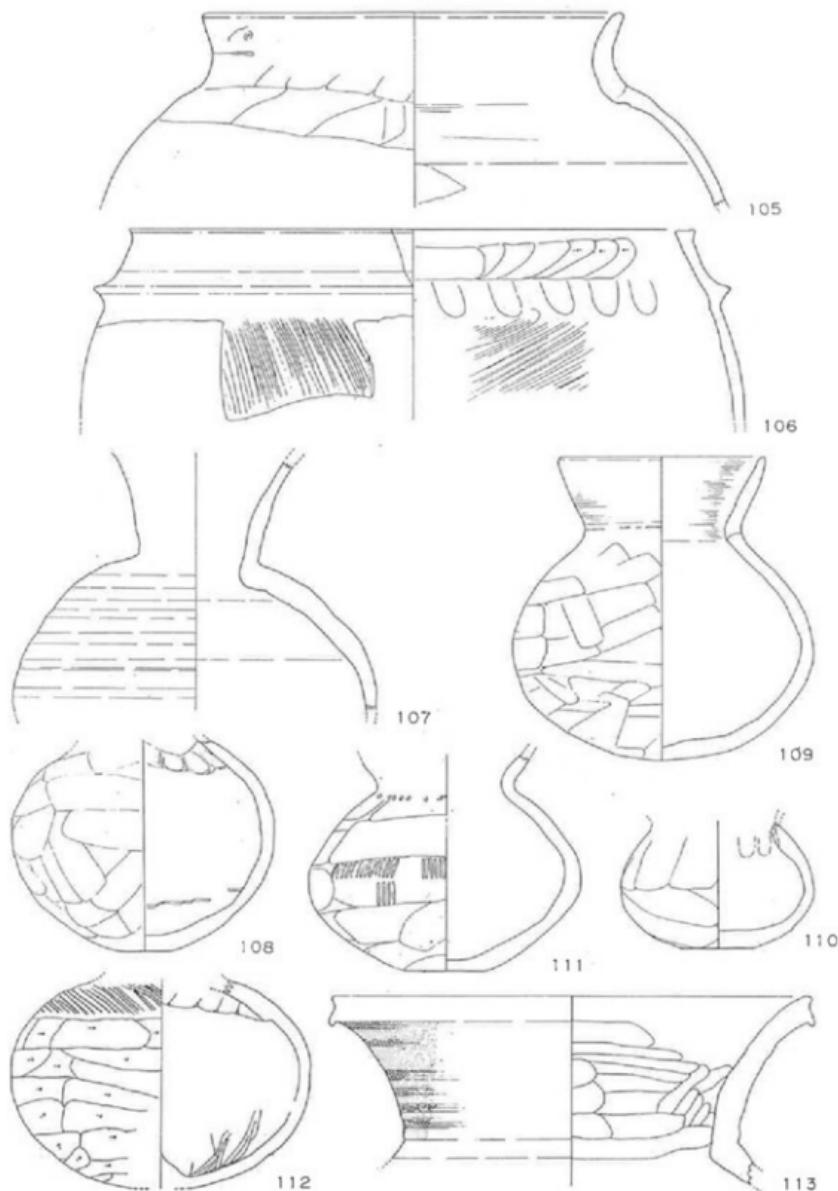


89

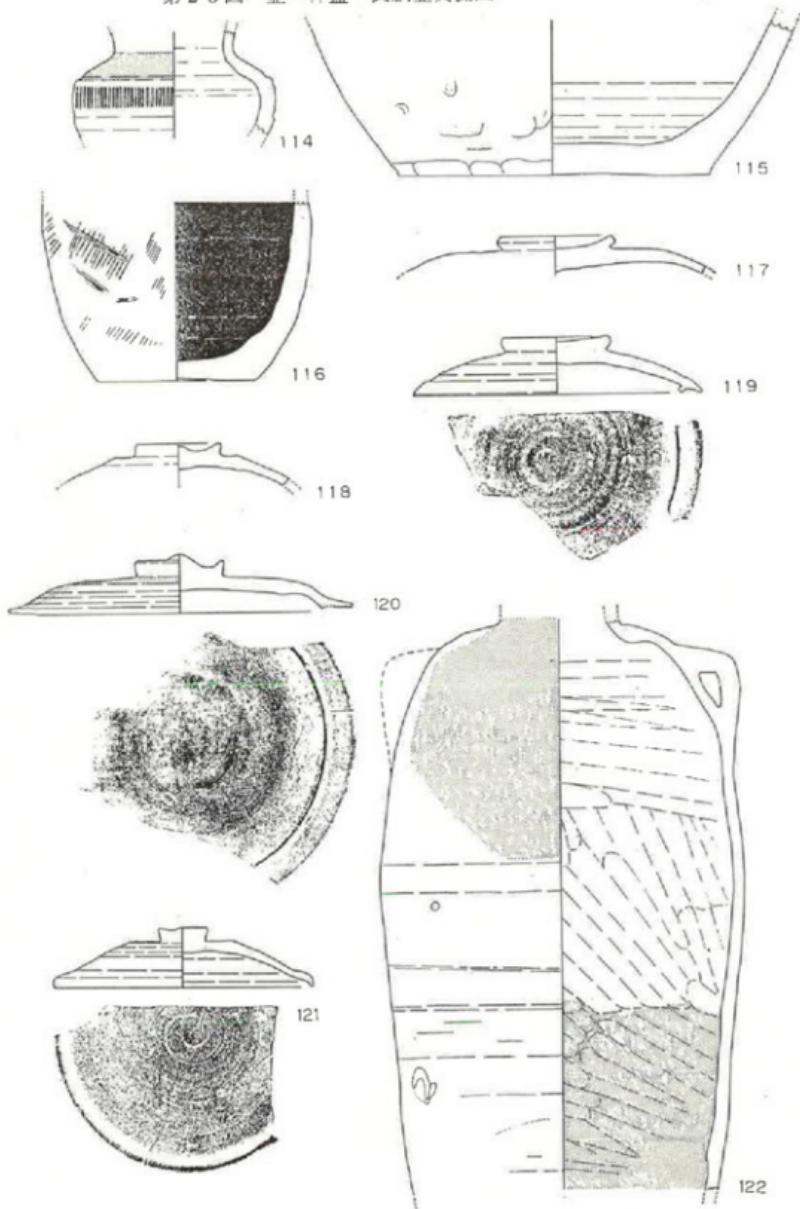
第21図 高台付塊・甕実測図



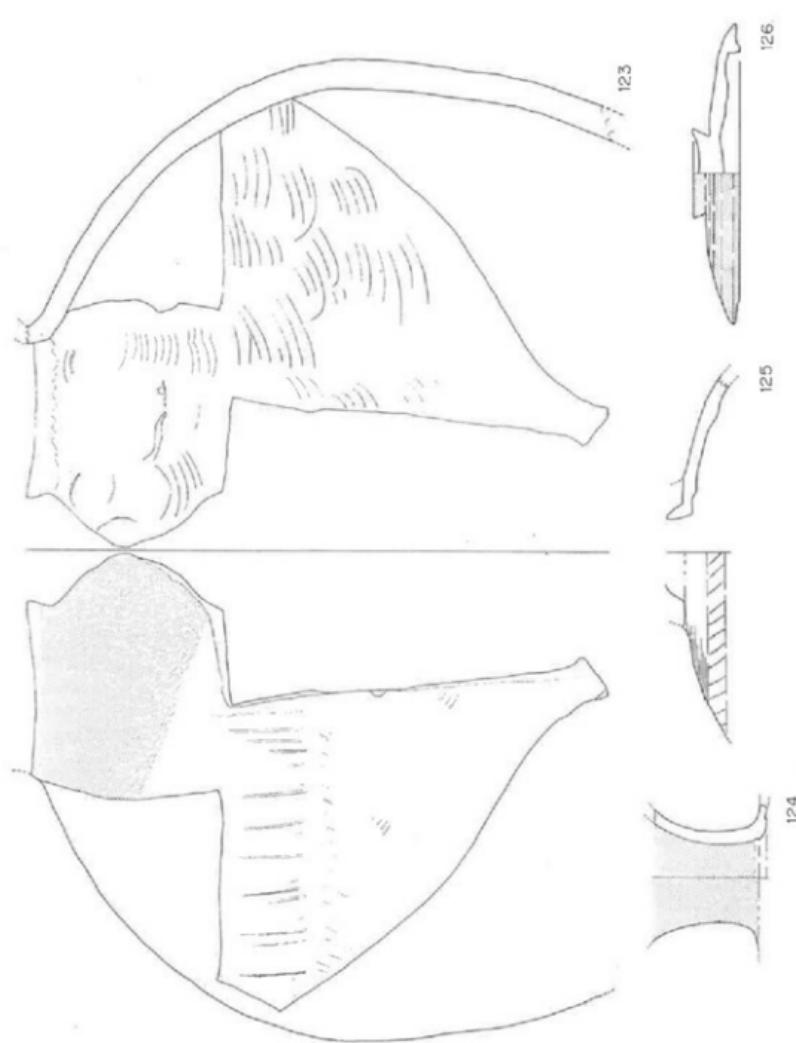
第22図 壺・羽釜・坩埚測図



第23図 壺・杯蓋・長胴壺実測図



第24図 猿患器大甕・杯蓋・長頸壺頸部実測図



第4表

## 植物・木製品観察表

番号	出土地點	器種	樹種	特徴（製作・形狀と出土状況）	備考
1	E-8-5	斧	楓	丸木材、長さ1.06cm、太さ9.2~9.6cm先端部は三方から加工。鋸矢穴端部を作ったもの、頭部にまくれが見られる。	
2	C-10-9	鍛冶材	クスモ櫟	板材、長さ1.056cm、巾1.4cm、赤褐色の表面	
3	C-2-1	建築材	松	丸木材、端に旋削されたものか、長さ2.36cm、太さ1.34cm、両端に仕口を作っている。切り込みは1.2.2cm程度は完全にはがされている。	
4	E-7-12	斧	楓	丸木材 2.5.9cm太さ5.7cm先端は二方向から幅広く、鋸く削られている。頭部にまくれが見られる。	
5	D-8-21	建築材	杉	角材、長さ1.00cm、巾1.0.2~7.4cm板目材状を呈す。	
6	D-7-12	楓		底面部外側クロに装着した時の刃の裏イケ所が見られる。底面部径1.0cm	赤地
7	同上	楓		少し高めの高台部を呈している。内面底面部クロ痕が見られる。底面部径5.5cm	
8	E-3-1	櫛		口縁部を欠く。体縫は縦く内側しながら縦縫部へ。口縁部はわざか外反し始めた所で欠損している。高台部の痕跡が復元される。黒墨塗布	漆塗
9	E-6-1	楓		黒色の漆塗 口縁部から体部の一帯	
10	E-8 F-8	種子		ひょうたんの特徴の種子と果皮。E-8, F-8グリット付近に集中して確認された	
11	同上	種子		桃、胡桃	
12	D-3-7	楠木	楓	建築材（角材）	
13	D-3-1	板	杉	鋼鉄を付けた板状のもの。	
14	C-8-25	防衛具	不明	両端に突起を持つ。（高脚刀用具か） 大阪文化財センター「出島堂」遺跡出土の有頭状小鉤鉄と同類	
15	C-4-7	楠木	糞糞樹	建築材（角材）	
16	D-7-3	楠木	栗	建築材（角材）	
17	E-7-3	燃焼木	栗	全体的に炭化している。	
18	C-4-18 C-4-19	竹	ハナの木	シキミ（櫻）の異称	
19	C-2-10	杵	楓	材質からするとN-18とは用途が異なると考案される。	
20	C-9-8	手斧柄	松	造形状態の良い手斧の柄である。右端は斧、枝を握り部に作り出している。 前後全長(32.5cm)柄の長さ(24.0cm)幅(5.0~4.3cm)右端部の長さ(17.0cm)右端部はその先端部を削り込み斧頭の握りを可能にしている。斧頭部の削り込み幅は(5.0cm)。斧頭部の形状から鉄斧頭は複数に落らし削入されたものであろう。 奈良 平城京出土（吉田町西の本置院跡）に同物が見られる。	
21	E-8-27	荷役	糞糞樹	不明（未発見）	
22	D-3-8	櫛	楓	「農具」-用具にみる農耕文化のあゆみ 農業社会歴史館資料によると古墳や各遺跡から見出された鉄製の頭や頭は本身に取り付けた歎の男先だけであるため、それが張先なのか頭先なのか区別することは困難で……。都馬整理収文化財調査事業団 川原吉久著「農具」の名義に因って 研究叢書第3号による。 となるが本身だけではやはり頭先なのか頭先なのか区別する事は困難である。	
23	C-10-1	頭	楓	正倉院開庫の「子口手辛櫛」の本部と同型柄かと考えられる。	
24	D-7-11	田舟	櫻	静岡県立昌黎遺跡 山本遺跡出土品に類似品が見られる。	
25	C-4-1 C-4-2	馬齒		出土状況からすると、当遺跡は牛糞田の田圃原と考えられる。御久保1遺跡と同様	
26	E-8-12	ヒュウタツ 栗皮		内版8 果皮片の一端に頭痕跡が見られる。	
27	F-8-7	櫛頭	楓	全長(54.5cm)頭部(28.0cm)頭部(8.5cm)柄部(26.0cm)先端部径(3.0cm)空細 川貝 振り部上端にまくれが見られる。	

## 出土遺物観察表

法量の( )は推定値

番号	出土地點	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	模様の特徴	直行・備考
28	C-5-1	寛永通寶	江戸東人丁町銅鑄錢 万延元年(12月)(1860)					
29	D-6-1	寛治通寶	元治8年(1863) 北京(1871)とがある					
30	D-2-15	小瓶	11 底 高 (26) 45 90	石英を含む 硬	灰白	1脚底部を欠くが頭部はしまり脚部は丸形を呈す。 (外)脚部から頭部上半は灰青色一部灰黒色の焼合により黒色を呈す。 (内)頭部の内面に横筋ナデ。脚部最大径(7.9)cm		ほぼ丸形
31	D-2-9	碗	11 (14.6)	均質の胎土 である 硬	オリーブ灰	体部は緑く円錐しながら立上がり口縁部はほぼ直線 (外)側面にクロマ形、川字状に施墨を呈す。内ロクロ 意形、丁寧なナデ。肩部の周辺を除く、裏面である。	口縁部 1/3残	
32	F-4-4	須恵 (2m7)	底 43	砂粒を含む 硬	灰	底部から体部は造形的に開く、内外面墨ナデ。内面底盤には 同心丸状のリムナデが見られる。大柄より出土	底部 2/3残	
33	B-7-2	土師 (2m7)	口 底 高 (5.0) 28 (25)	砂粒を含む 軟	灰	脚下部 直線的に開く (外)底部から5mmの所に沈線を施している ナデ (内)底部から1.5cmの所に沈線 ナデ	底盤破片	
34	F-4-31	瓦 軒丸	原径(17.4) 洞 (8.4)	白色細砂 入 やや軟	青灰	瓦当部と瓦丸部との接合部、頭面は接合時の脂ナデ、一部に布 目を残す。瓦当部には刷毛に脂目を重ねている。四分寺瓦と同 様。5枚の内2枚が確認出来る。	瓦当部 1/3残	
35	C-6-4	瓦 軒平		黒色粗砂を 含む 硬	灰	出来上がった瓦片に粘土を盛り上げ頭部はヘラナデ後へラ捺き 文有り。頭面の布目模は手引酒されている。	破片	
36	G-5-10	瓦 軒丸		白色の砂を 含む 硬	表面 墨 裏面 断面灰白	糸切り模、中空には墨目有りがあつたものと思われる。その周 間に剥離が見られる。	破片	
37	C-1	瓦 軒平		黒色粗砂を 含む 硬	表面 黒	頭頂部のみ、半瓦部へ頭部を羽口込んだ模が見られる。 墨目模の合せ目あり。裏面の面より3。	破片	
38	表	瓦 軒平		黒色砂粒を 含む 硬	灰白	布目模の上に刷毛模の物でstri消す。つなぎ目前が見られる。 ヘラ押き模有り。	破片	
39	D-4	瓦		粗砂を含む	裏面に 似 い 赤褐 墨面 灰	半瓦裏面に格子文墨目有り。四面都目ナデ消す。	破片	
40	F-4-27	特殊		粗砂を含む やや硬	褐暗赤褐	模様を呈し裏面はヘラ削り後ナデ。走り込み状になった先は内 面に接しナデされている。一方の端は丸ナデられインクが見 られる。		
41	C-3	門檻 車輪	厚 1.5	粗砂を含む 軟	暗褐	平行する2本の凹凸をめぐらせて(10.0×高さ0.3)cmが貼ら れタガ及びタガの上部は墨ナデ。内面は粗いナデ。	門の一部 1/2残	
42	D-5-3	瓦 軒平		白色粗砂を 多量に含む	灰白	正面は丁寧なナデが施されている。背面は布目模が残る。 墨目剥落き取り航右り。	破片	
43	36p面 粘	瓦 軒丸		白色細砂混 入 硬	青黑	丸瓦で凹面墨文、ヘラ削りにより整形している。凹面布目、一 部墨ナデ布目を消す。「寺」の字ヘラ書き。	2/3残	
44	C-9-4 C-9-5 C-9-6 C-9-11 D-10-5	瓦 瓦	長 36.4	混色粗砂を 含む 硬	灰 (墨色の 斑点)	凹面墨目、頭部はヘラ削り。凹面布目、一部ヘラによりストリ消 す。全体に釉薬がかかったように見えるのは黒色の渦物の発泡 による。 D-10-5は大柄の床面より出土(西 N.E.)	3/4残	
45	C-8	瓦	11 (16.8)	粗砂を含む やや軟	灰白	頭部の粗砂が鋭角をなす。口縁部より脚部の方が厚い。 (外)口縁部墨ナデ、脚部墨目。 (内)口縁部墨ナデ、脚部墨目。	口縁部から 脚部	
46	E-8-8	燕	11 (16.4)	粗砂を含む 硬	灰白	口縁部はS字状を呈す。(口縁部が脚部より厚い。 (外)口縁部墨ナデ、脚部墨目。N.D.45より脚部墨が細かい (内)口縁部墨ナデ、脚部墨目。	口縁部のみ 1/4残	
47	D-7-3	杯	11 高 5.2	粗砂を多量 に含む や 硬	赤褐	ほぼ均一した厚みを持ち口縫部で薄くなる。底部から脚部は球 形を呈し口縫部は平行に外反する。 (外)口縫部及釉薬部はヘラ削り後丁寧な模ナデ、脚部はヘラ 削り、底部は不定方向ヘラ削り。 (内)口縫部は削りナデ、頭部はナデにより粗やかな模を持つ。 脚部から底面は丁寧なナデ。	ほぼ丸形	

番号	由田鉱質	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴 烧形の特徴	填充・繊芳
48	C-8 D-8 E-8-5	杯	口 13.5 高 8.2	粗粒を含む 硬	明赤褐	体部から底部にかけて厚みを持つ。口縁部は薄く丸い。 (外) 体部上半部は立つ。口縁部は外反する。 (内) 体部にヘラ削痕が、全体にナデ。	口縁部 1/2欠
49	C-9-43	杯	口 (12.6) 高 (5.1)	粗粒を含む 硬	暗赤褐	胎土上半部に厚みを持つ。底盤から胎土半部は端面に立ち上がり、上半部は直面に立つ。口縁部は外反する。 (外) 粗粒部は横へ調整接觸ナラ、胴部はヘラ削り後ヘラ調整 (内) 全体は丁寧なナデ、細い凹凸状削痕が残る。	口縁から胎 部 1/4残
50	D-8-8 D-8-9	杯	口 13.8 高 5.3	粗粒 硬	暗赤褐	底盤がやや厚みを持つ。胎部「く」字状に外反し口縁部で立ち上がる。 外表面は削痕はナラ、内外面全体部はヘラ削り、内面底部にヘラ削痕。底部はナラ、底底全体に炭化物が付着する。	口縁部 1/3欠
51	D-7-1 D-7-2	杯	口 13.4 高 5.3	粗砂を含む やや軟	暗	底盤に怪しき厚みを持ち口縁部で薄く外反し細い内斜を持つ口縁部は丸い。 (外) 口縁部から底盤はヘラ削りしたが楕円が強くへラ削痕を認めていく。底部に炭化物の付着が見られる。 (内) 丁寧なナデ調整後左上がり放射状削痕が見られるが確認しにくい。	4/5残
52	D-8-5	杯	口 (14.6) 高 5.5	粗砂を含む 硬	暗	ほぼ均一な厚みを持ち、口縁部で薄くなる。底盤から胎部にかけて胎形を呈し口縁部は「く」の字状に外反する。 (外) 口縁部及び底盤部はヘラ削痕後左右厚なナラ。削痕部はヘラ調整。底部は不定方向へラ削り。 (内) 全体に丁寧なナデ、山2~3mmの放射状削痕が残る。	3/4残
53	D-2-1	杯	口 (16.4) 高 7.4	砂粒を含む 硬	暗赤褐	胎下半部は扁平、上半部は直面に立つ。口縁部は外反する。口縁部は丸味を持つ。 (外) 粗粒部はテラ胎土半部は指押さえ、胎下半部は丁寧なヘラナラ、右方向へラ削り。 (内) 内面全体丁寧なナデ後胎部に右上がり削痕。底部中央が削かずむ。	2/5
54	表	砾石	長 (6.7) 短 2.3 高 1.0	硬	灰黄褐	5面使用し、その内4面が多用されている。一方の端が欠損している。 石質は砂岩である。	
55	R-3	砾石	長 (4.4) 短 3.8 高 2.4	滑な粘板岩 軟	浅黄褐	5面とも複数面有り。その内3面が多用されている。 一方の端が欠損している。	
56	3kg -皆	砾石	長 5.1 短 (3.9) 高 2.7	やや粗 硬	紫黒	4面使用し、その内1面が多用されている。 両端と一方の端が欠損 石質は安山岩	
57	C-7 -S-5	砾石	長 (6.0) 短 3.7 高 3.2	硬	暗灰	4面使用し、その4面とも多用されている。一方の端が欠損している。使用されていない面には加工時の条痕がある。 石質は粘板岩	
58	D-4-3	劫鉢車	厚 1.7	砾石	暗青灰	砾石を円盤状に研磨 穿孔はやや左側に片寄る。	
59	C-2-2	劫鉢車	厚 0.8	密 硬	暗	土器底面を再利用 亂い脱さから杯の底面を利用したものと思われる。	
60	D-6-3	劫鉢車	厚 1.0	砂粒含む軟	灰	土器底面を利用劫鉢車としては完形と考えられる。	
61	C-4-16	劫鉢車	厚 2.1	軟	暗灰	截頭円錐形である。上面直徑は2.4cm、下面直徑は4.4cmを測る 穿孔は上面が下部より1mm大きい。側面削痕による状痕がある 下面との隙の部分も削痕により内を丸くしている石質は蛇紋岩	
62	D-5	杯		粗砂を多量 に含む 硬	外 にぶ い黄褐 内 赤褐	体部内面に墨痕が見られる。体部下半部にヘラ削り痕。 内面は丁寧なナデ、底部にイフジ	体部の一部 埋出
63	C-4-3	高杯	口 (15.3)	粗砂を含む やや軟	明赤褐	ほぼ均一した厚みを持つ。底盤から口縁部まで内斜きみに立つ。口縁部は鋭い、体部との境にはっきりした接觸を持つ。 (外) 口縁部はヘラ削痕、口縁部特に鋭く細くなる。底盤は丁寧なナデ (内) 回転ナラ後ヘラ削痕、口縁部内面に「口」の墨跡。	埋出「口」
64	D-5-13	高杯	上 34 下 5.2	粗砂を含む 硬	外 黄褐 内 斷面	高杯の輪郭部、杯接合部が最小、端の接合部が最大径を持つ。周囲は大きく開く。 (外) 接合部はヘラ形状へラナラ、底部も杯部も不明。 (内) 5面のナデ	脚柱部
65	3kg -皆	高杯	口 (15.8)	粗砂 硬	赤褐	高杯の杯部、ほぼ同一の厚さを持つ。口縁部は丸く底盤は平坦に保、底盤と体部の境に底を持つ。内面には丁寧なヘラ削痕が見られる。	杯部 1/5残

番号	出上鏡評	種類	決量(cm)	脂上・焼成	色調	雲形の特徴 梨形の特徴	遺存・備考	
66	D-4-2 (E-3 A.5)	高杯	D (18.0)	粗砂を含む 硬	内外 褐褐色	杯部と脚部の混合部に凹部を持つ。内底状平坦面から直線的に内側しながら口縁に至る。口縁部は内陷する。 (外) 内底状接合部から口縁部は沿アザ後へラブキ、接合部斜 押さえ。 (内) 1重なナゲの後へラブキが口縁部から底部平坦面まで及 んでいる。	杯部 1/2弱	
67	C-4	高杯	D	18.5	粗砂を含む やや軟	にふい黄 体部から口辺にかけて薄くなる。杯部内底に段を持つ。口縁部 はなだらかに外反する。口縁の先端は丸い。 (外) 口縁から体部延斜板ナゲ。体部から脚柱部は斜押さえ様 ヘナダ。 (内) 口縁から体部は直角性ナゲ。一部左上がりのナゲ。	杯部 3/4	
68	F-9-2	杯	H 高	10.4 3.0	細砂を含む やや軟	明赤褐	底部手持へラブキ。底部は丸味を持つ。口縁部内底斜板ナゲ 内面は全面ナゲ。	1/2残
69	D-8-1	杯	H 高	13.4 4.9	砂糖を含む 硬	暗赤褐	ほぼ均一した厚みを持ち、口周部で薄くなる。底部から副脚部 は球形を呈し、口縁部D字型にする。口縁部は丸い。 (外) 口縁部は楕円ナゲ。脚部から底部はへラブキ後へラナゲ (内) 底部は1重なナゲの後爪型が多数残されている。瓶形後 右上がり放射状研磨。	1/2
70	D-5	杯	H 高	(12.0) 3.5	砂糖を含む 硬	にふい赤 褐	底部から副脚部にかけては丸味を持って球面状。口縁部は直面に外 傾し口周部は軽かに外反する。瓶部に不明顯な外筋を持つ。 (外) 口縁部楕円ナゲ斜面脚部押さえ痕めぐる。体部から底部は へラブキ。 (内) 口縁部横ナゲ 底部ナゲ 平底。器壁は薄い。	1/4
71	E-7-1 E-7-2	杯	H 高	11.7 5.7	粗砂を含む 硬	暗赤褐	器身は丸くて脚部は丸みを持ち。口縁部は直立する。口周部欠 け。体部との境に施を有する。 (外) 口縁部横ナゲ。底部はへラブキ後ナゲ。 (内) 内面は横ナゲ。	2/3残
72	C-8-1	杯	H 高	12.4 6.0	細砂を含む 硬	にふい赤 褐	底部の中心から体部に向かって薄くなる。口縁部は直立する。 体部との境に施を有する。 (外) 底部はへラブキ。口縁部横ナゲ。 (内) 1重な横ナゲ。底部は同心円状の整形痕を示す。	ほぼ完形
73	C-9-31 C-9-32 C-9-33	杯	H 高	12.8 5.6	砂糖を含む やや軟	赤	ほぼ均一した厚みを持つ。底部は丸底で外筋を持つ。口縁部は直 立する。底部にイシナあり。 (外) 口縁部は楕円ナゲ。底部はほぼ一定方向にへラブキ後一部 へナゲ。 (内) 口縁部横ナゲ後底部は回転ナゲ。ナゲ痕は口縁部を横に 横切る。	3/4残
74	E-8-9 H面-括	杯	H 高	13.0 5.3	粗い砂糖を 含む やや 硬	暗赤褐	口縁部が丸くして底部より厚みを持ち、明顯なる骨を持つ。口縁 部は直立する。口縁部内外面斜面に楕円ナゲ後にV字からH斜 面へ接ぎ切っている。底部外筋はへラブキ後一部へラナゲ。内 面底部はへラブキ横ナゲ。	1/2強
75	C-8-2	杯	H 底 高	(14.0) (6.1) 4.2	微細砂糖を 含む やや 硬	灰白 イシナ混	体部は内側しながら立ち上がり口縁との境で凹部を示す。 (外) 底部は回転へラブキ。口縁部は楕円ナゲ。 (内) 回転ロウリ整形形。底部はへラブキ付近。	1/3残
76	260面 一括	杯	H 底 高	(12.0) 6.8 3.8	微細砂糖を 含む 硬	灰白	深い体部は大きく内側しながら立ち上がる。全体に厚膜である (外) 口縁から4mmに凹がる。回転あ切り後へラブキ。 (内) 内外面斜面ナゲ。平底で中央部は特に厚い。	1/3残
77	260面 一括	杯	H 底 高	(12.5) 9.0 3.9	粗砂を含 む 硬	外 灰白 内明赤灰	体部は内側突起にして立ち上がり、口縁部はオバカに外反する。 (外) 回転へラブキ横ナゲ。口縁部による回転あ切り。 (内) 回転横ナゲ。内側には朱が付着している。	1/3残
78	G-4-43	碗	H 底 高	(12.6) 6.8 4.0	粗い砂糖を 含む 軟	灰白	体部は内側しながら立ち上がり、口縁部はオバカに外反する。 (外) 底部脚柱部切り後高台の貼付け痕を残す。粗い回転ナ ゲ。 (内) 底部はやや凸起形。回転ロウリ皮膜。裏摸あり。	1/2残
79	F-19-21	碗	H 底	8.4	粗砂を多量 に含む 軟	内 墨 外 にふ い黄	回転系切り痕。体部は大きく内側しながら立ち上がる。高台の 都度面を水平にへラナゲされていて。 (外) 回転ナゲ堅膜。高台は貼り付け接合痕を残す。 (内) 内面全体に墨が附着している。墨の纏毛目(7cm)が見 られる。	底部充形 口縁部欠
80	E-10-1	碗	H 底 高	12.4 6.4 2.0	粗砂 硬	明赤灰	体部は浅くオバカに外反しながら開く。高台は直立する。跡は 横も岸り。 (外) 口縁から体部は回転ナゲ。高台部内側回転系切り痕。 (内) 回転ナゲ。体部から底部の境には2本の同心円状の段を 持つ。	完形

番号	出寸位置	種類	法量(cm)	鉛土・筋瓦	色 調	器 形 の 特 徴	瓶形 の 特 徴	追仔・備考
81	P-8-1	盤	口 底 高	18.0 13.0 3.6	細砂を多量 に含む 軟	内 にぶ い鉛土 外壁緑灰	瓶型から体部にかけて長い傾斜を持ち口縁部は直に立つ。高台 は貼り付け接地点は内凹する。 外側脚折出ナデ。内面はロクロ整形。	ロ縁部を レフ欠
82	3段X前 一括	盤	口 高	11.4 2.3	細砂 やや軟	淡白	体部から口縁にかけて外反する。軸は内側脚手取り、その後抜 け型。 (外) 高台部回転系切り。口縫から高台迄ナデ高台は直立して 無い。 (内) 回転ナデ、底部中央に崩れ跡を残す。体部と底部の境に 溝を持つ。	ほぼ完形
83	C-5-13	塊	口 底 高	9.3 5.8 5.0	粗 鉛 軟	灰赤	高台は貼り付け (外) 体部ロクロ痕、底脚回転系切り。 (内) 緩形は丁寧でない	ロ縁部 1/2 残
84	C-5-11	塊	口 底 高	9.8 5.9 4.2	粗 やや軟	にぶい軟	ロ縁部は2箇所欠損。高台は貼り付けナデ調整。 (外) ロクロ痕明顯。丁寧なナデ調整。 (内) ロクロ痕。	ほぼ完形
85	C-5-15	塊	口 底 高	(9.8) 5.8 4.2	粗 軟	暗赤褐	ロ縁部は2箇所外反する。高台は貼り付け、丁寧なナデ調整 (外) ロクロ痕 (内) ロクロ痕	体部からロ 縁部は 2/3欠
86	D-1-3 D-1-4 F-4	塊	口 底 高	15.8 7.2 6.9	細砂を含む 硬	灰白	体部は深く、大きく内凹しながら立ち上がり。 (外) ナデ調整。高台は差引り後貼り付け。 (内) ロ底部と底部中央に沈黙が見られる。体部下部剥離け跡	ほぼ完形
87	D-5-7	塊	口 底 高	(15.2) 8.1 5.1	側かに砂粒 が見られる 硬	灰白	体部は内凹しながら立ち上がり、ロ縁部は直線的に斜か外反する。 高台の先端は丸棒を握る。 (外) 高台部は丁寧な回転ナデ。 (内) 内側のみ弱い痕跡が見られる。	ロ縁部 1/6 高台 1/2
88	C-5-6	塊	口 底 高	9.8 5.7 4.2	粗 鉛	外暗赤褐 内にぶい 褐	接合部はナデ調整 (外) ロクロ痕明顯、底脚は差切り。 (内) 丁寧なロクロ整形。	完形
89	D-5-4	塊	口 底 高	(9.8) 6.8 4.2	粗 やや軟	にぶい软	体部は大きく内凹しながら立ち上がり高台部は器頭である。ロ 縫はわずか外反。 (外) 全体にロクロ痕を極め、高台の貼り付けは丁寧。 (内) 丁寧なナデ調整	ロ縫 完形
90	E-10-2	塊	口 底 高	13.8 7.3 5.2	細砂を多量 に含む や 軟	内にぶい 赤褐 内明黄褐	体部は内凹しながら立ち上りロ縁部は僅か外反する。底部型盤 を量す。 (外) 体部ロクロ痕は良く擦でられ、太く長い高台はロクロ模 ド3本の捺痕内部が見られる。 (内) ロ底部ロクロ痕	ロ縫 完形
91	D-3-1	塊	口 底 高	10.8 6.1 4.1	やや粗 軟	明赤褐	体部は大きく内凹しながら立ち上りが器頭である。 (外) 全体にロクロ痕。高台貼り付けやや難。 (内) ロ縁部に疎。	完形
92	C-9-10	杯	口 底 高	9.0 4.6 2.6	細砂を多量 に含む 軟	浅赤褐	器部は厚く底部は中央で上打紙を呈す。ロ縫部は厚く丸味を持 つ。 (外) 系切り後ヘラナデされ、わずかに糸切り痕を残す。 (内) 体部中央に沈黙が見られる。	完形
93	C-10-1	杯	口 底 高	9.6 5.6 2.6	細砂のほか 粗粒を含む 軟	淡白	底部回転系切り痕。底部の深い糸切りが行なわれている。その為 体部下端と底脚との間に段を持つ。 (外) 嘴部糸切り痕、ヘラナデ 引り消し。内外面中軸ナデ。 (内) 底部中央突起を有する。	完形
94	E-5-1	杯	口 底 高	8.5 4.5 2.1	黒色の細砂 を多量に含む 軟	暗赤褐	底部糸切り痕削除。体部は弱い傾斜で内凹しながらロ縫に至る (外) 内外面に煤が見られる。 体部中軸ナデ。 (内) 回転ナデ。	完形
95	D-11-3	杯	口 底 高	9.6 5.7 2.8	黒色の細砂 を含む 軟	浅黄褐	高い系による糸切り痕。体部はわずかに内凹する。ロ縁部は直 線的にロ縫部に至る。 内外面簡単な回転ナデ。	完形
96	C-5-2	杯	口 底 高	10.0 6.7 3.1	細砂を含む やや軟	明青灰	底部は糸切り痕を残すが丸く尖出している。体部は内凹しなが ら立ち上がりロ縁部はわずか外反する。 (外) 体部、底脚に不定方向の織痕模様有り。底脚に煤。 回 転ナデ。 (内) 糸切りナデと指のあとを残す。ロ縁部の格形は 完形でない	完形
97	G-3-3	杯	口 底 高	10.4 5.0 2.7	細砂を多く 含む やや軟	にぶい軟	体部は内凹気味に立ち上がり、ロ縫部は外反する。器内は厚い (外) 回転ナデ、底脚糸切り痕。 体部半面に見られる。 (内) 丁寧な回転ナデ。	ロ縫部 レフ欠

番号	出土地質	種類	法寸 (cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	胎形の特徴	遺存・備考
98	D-3-2	塊	口 (16.4) 高 (5.2)	黒色の細砂 を含む 硬	灰白色の 素地に釉	体部は内厚しながら口縁部で大きく外反する。器内は薄い。 (外) 体部に窓内での接触痕あり。高台は系切り貼り付け、丸 味を持つ。 (内) 内輪ナデ。		1/3
99	泥表面 活	塊	口 (13.3) 底 縫 高 5.8 5.0	粗砂を含む 硬	灰白	体部は大きく内厚しながら立ち上がる。直線的な高台を持つ。 網目による施釉後剥離け。 (外) 番号による転写系切り痕。高台は貼り付け接合部は丁 寧なナデ。 (内) 口縁部ヨコ痕明顯。1回は底部焼き 2回目は部内收 束の施跡。		1段階 1-4
100	B-5-1	器台	底 縫 高 11.9 7.7 3.2	粗砂を含む やや軟	暗赤褐	平底在直立部と脚部は貼り付け。内外面とも回転ナデ。 受部の窓内転写系切り痕が複数ある。外側の一部にインシが見 られる。		受部 1-3段
101	C-5-3	器台	底	9.2	粗砂を含む 硬	赤紅	内外とも回転ナデ、外面へラ筋痕。脚部と受部との接合部。基 部に焦がれ見られる。	脚部 1-3段
102	E-3	器	口 (36.8)	砂粒を多量 に含む 軟	外輪赤褐色 内 黑	ほぼ均一の厚みを持つ。底部は少しきれいな縁部は強く外反す る。 (外) 口縁部は横ナデ、脚部は不定方向へラ削り。 (内) 口縁部は指による横ナデ。		口輪部 1-4段
103	D-8-3 D-8-4 2 b-15	黑	口 13	粗砂を含む やや硬	オリーブ 灰	口縁部は「L」の字状に外反し肩は張らない。口肩部は薄くなる に縁部横ナデ、脚部外側は腰位のへラ削り。内面は横ナデ、肩 部から口縁部にかけて輪筋痕現れる。		口輪部のみ 1-3段
104	C-4-6	器	口 (21.4)	粗砂を含む 硬	暗赤褐	口縁部は「L」の字状を呈す。粘土類似。口縁部内外輪横ナ デ、脚部外側は肩横位の削り。		口輪部 1/3段
105	C-2-1	黑	口 (21.0)	粗砂を含む 硬	燈	口縁部は「L」の字状を呈し口邊は丸みを持つ。脚部部位に較 大径を持つとされる。 (外) 口縁下部仰頭形、胴上部横力向へラ削り。 (内) 口縁部横ナデ、脚部接合部、脚部ナデ。		脚部元 1/4段
106	E-3	羽釜	口 (28.0)	粗砂を含む やや軟	淡褐	口縁部は大きく内側する。鋸は小さく断面は三角形を呈し口縫 部は厚い。 (外) 口縁部横ナデ。鋸は折み出し。 脚部2輪毛ナデ 整形。 (内) 口縁部左方向指押され、脚部は右上から左下方に向て輪毛 H。		口縫部 1-3
107	C-4-1 C-5 F-4-42	甕	口 (8.6) 胸 18.0	微密である やや硬	外 黑 内 にぶ い黄褐	口縁部は逆台形を呈し脚部は球形である。内外側脚部横ナデ。 炭化物の付着が多く見られる。口縁部と脚部の接合部はへラ削 り。底部は丸底で不安定。		口辺と底部 を仄く
108	D-5-44	甕	胸 13.5 底 縫 高 4.1 10.6	粗砂 軟	外 僧 内 白	脚部は「L」の字状に通じ、最大径は胴下部に位置する。鳥喙 形、平底。 (外) 口縁部横ナデ、胴下半部へラ削り、脚部に丸い工具によ る何突穴あり。 (内) 口縫、胴上半部共にナデ、胴下下半部脚部が6面施 され底部中央に集中。		脚～底部 口縫部を仄 く
109	D-5-16	甕	底 3.4 胸 9.5	粗砂粒を含 む 硬	黄褐	脚部の甚大な凹みで口方ににくく。小さな平底を持つ。脚部 接合部が見られる。炭化物の付着有り。 (外) 胸上半部へラ削り後へラナデ、胴下半部はへラ削り後 脚單なナデ。 (内) 脚部接合部分は指押され、他はナデ。		脚部 1/2段
110	G-4-3	甕	高 13.0	粗砂を含む 硬	赤褐	脚部最大径を中位にとる。ほぼ円形を呈する。炭化物の付着が 見られる。 (外) ヘラ削り後ナデ、脚部下部は扭いナデ。 (内) 脚部痕を残。脚部の接合部は指押され。底部の接合はナ デ。		脚部のみ
111	D-4-1	口 胸 高	口 (10.3) 14.9 15.3	粗砂記 軟	外 僧 内 褐	脚部は「L」の字状に屈曲する。脚部は扁錐形。夫底。 (外) 口縁部横ナデ、脚部上半分へナデ。胴下半部横方向へ ラ削り。 (内) 口縁部横ナデ、脚部接合部指押え。		口縫部 2-3段
112	C-4-44	甕	胸 14.8	粗砂を含む 硬	にじむ赤 褐	脚部最大径は中位にある。ほぼ球形を呈する。 (外) 脚部はへラ削り、脚上位から底部迄左から右方向へのヘ ラ削り。 (内) 脚部接合部端子の感り上がりあり指押、細いへラナデ後 ナデ。		脚部～底部

番号	出土地位置	種類	法規(cm)	胎土・焼成	色 調	器 形 の 特 徴	胎 形 の 特 徴	遺存・参考
113	D-5-2	甕	II (242) 頸 (167)	白色細砂を 含む 硬	外青灰 内灰 胎肉暗赤 褐	口縁部はほぼ直線状に開き、口部は外反し折り冠す。頸ナメによる胎形。(1)縫合部は底面で2段に区画し、頸部まで構ナメ胎形。頸部と肩部の接合部が見られる。		口縁部 1/2
114	F-5-7	小型 甕	副部最大径 (10.0)	わざかに細 砂を含む 硬	墨 器形胎 揚	直立した頸部は内外面直ナメ。肩部は淡黄色を帯び、頸部との境は3本の沈捺で区画され、第2第3の胎膜の胎体には、胎目が見られる。内面は全体に崩す。		頸部～底部 1/4
115	C-5 事の面 一括	甕	底 (15.6)	粗砂を多量 に含む 取	暗青灰		底部と体部接合部有り、底部より内壁しながら立ち上がる。(外)折押さしきの接合部を多量に残す。(内)輪組みの接合折押さえ痕を残す。その後回転胎ナメ。	底部 1/2
116	事の面 一括	甕	底 7.8	粗砂を含む 硬	暗青灰	外側平行状開き口、底部は内凹しながら縮まる。内面は凹張胎ナメ、蓝色の付着物が見られる。		脚下半部か ら底部
117	C-7-6	蓋	II (15.0) 5.8 2.0	粗 砂	青灰	ロクロ胎形。(外)天井回転ヘラ切りその後ナメ、つまみの間に指上痕有り。(内)ロクロ胎ナメにより中央部盛り上がる。		1/6
118	事の面 一括	蓋	摘 4.1	黑色の砂を 含む 硬	灰白	天井部回転ヘラ削り内外面回転ナメ、リング状拘みの中央が丸く突出する。		蓋の中央部 のみ
119	F-5-8	蓋	II (12.4) 5.4 2.8	芯や粗 砂	灰白	天井部へフリギは無し、縫みは中央部が仰伏状を呈する。(外)天井部の弦糸別型。(内)内側に「かえり」を持つ。		1/5
120	F-5-1	蓋	II (15.2) 4.3 3.0	細砂 硬	外灰黄褐 内 青灰	ロクロ胎形。凹を持った縫みは中央部が周囲より高い。(外)天井部回転ヘラ削り、日輪跡。(内)回転ナメ、内側に「かえり」を持つ。		2/5
121	F-5	蓋	II (13.0) 2.5 3.0	細砂 硬	青灰	口縁部は直に下に折れる。(外)天井部凹へフリギ。(内)回転ナメ、重ね跳き折有り		1/3
122	G-3-6	甕	副部最大径 18.2	白色細砂を 含む 硬	外 青灰 内 青灰 器内 胎赤褐	外側全体崩す、腹幅5cm。肩部には肥厚を持ち自然軋が見られる。肩部は最大径、底部に向かってわずかに下がる。下位に沈締内の頭部が、肩上部は横ナメ、中位に右上方斜め口目があり下部に直角軋、底部に横ナメ。		肩 1/3
123	事の面 一括 C-6-3	甕	副部最大径 4.8	白色細砂を 含む 硬	外暗青灰 内 黑 胎肉 胎赤褐	肩から腹部破片丸みを持つ。焼拂り有り。外側は平行開き口に自然軋。内側折押頭後青漆文が見られる。黒色胎物が多量に見える(外側ではよくあわせ泡吹している)。頸部と肩部の接合部。肩部中腹に胎上縫による接合痕がある。		肩部 1/6
124	G-5-5	甕	頸部最小径 (4.6)	白色細砂を 含む 硬	灰白	瓶の形態。頸部と脇部の接合部分に胎上縫を使い胎ナメが見られる。(外)回転ナメ。胎毛による施施がされている。(内)胎毛による施施(施施時のタレ泥合部まで達する)		頸部のみ
125	事の面 一括	甕	肩部最大径 (18.0)	黒色の砂粒 を含む 硬	青灰、著 地は灰白	甕上部の頸部から頸端部の接合部。特に頸部の接合状態が良くわかる。(外)肩部に2本の胎膜を列点文、その上部に波紋を施し、全体に胎目が入っている。(内)頸部と肩部に接合時の役溝が見られる。回転ナメ。		肩部 1/4
126	事の面 一括	蓋	II 15.0 4.4 2.3	芯や粗 砂	外 灰褐 内 青灰	14cmから芯断続で一列へ削り後脱い粗剣のヘラ削り。(外)全体に自然軋。回転ヘラ削りによる成形。(内)ロクロ特ナメ。		2/3残

## 第 V 章　まとめ

### 第 1 節　木製農工具について

日本の農業開始時期については、昭和 15 年福岡市板付遺跡、昭和 61 年佐賀県唐津市菜畑遺跡<sup>(1)</sup>から、水田址が検出されるなど九州北部では龜文時代晩期にすでに水田稲作が始まっていたとする説が有力となってきた。

以後 日本の農業と言えば稻作を示すほど重要な作物となっている。弥生時代の稲作は低湿地を利用した澗田で営まれ、農具としては木製の鍬・鋤・田下駄などが用いられている。<sup>(2)</sup>弥生時代後期には鉄製農工具の普及により農業技術は著しく発展した。

鍬や鋤の発達は生産力を高め、生産物の蓄積を可能にし、集落内に貧富の差や身分の差を生じた。

弥生時代の主だった農耕具には堅臼・堅杵・箕・田下駄・ワラ仕事の道具等はどれも最近まで使われた農具の原形そのものである。

古墳時代の農具の特徴としては、鉄製農具の普及があげられる。弥生時代以来の木製農具も依然として広く使われていますが、古墳時代の農具は、これらの木製農具を鉄におきかえたり、一部に鉄の刃先をつけたりした。<sup>(3)</sup>鉄製農具の発達と普及は生産の上でも著しい進歩をもたらした。<sup>(4)</sup>鉄製の鍬、鋤は深耕を可能にし、鉄製馬鍬は開墾に威力を發揮し、鉄鎌は収穫の能率を高めた。

5世紀中頃に鉄製打鍬からU字型鍬先へ変化し鍬も直刃鍬から曲刃鍬へと変化した時期である。<sup>(5)</sup>さらに 7 世紀になると茎付鍬があらわれる。

奈良時代になっても、農具の基本的な形態は、古墳時代と殆どかわりない。  
ただ奈良時代以降は文献資料からもその実態をくわしく知る事が出来る。

大化の改新以降班出取授法によって区分田を与えられた。一方租・庸・調・雜徭などの負担をおう事が義務付けられた。

7世紀末から8世紀にかけて大賜品として鉄製農具が含まれている。

奈良時代の農具について語るとき、必ず触れなければならないものに、正倉院御物の「子日手辛鋤」があります。この鋤は、柄の文字によって天平宝字 2 年（758）1 月 3 日に孝謙天皇によって儀式に用いられた事がわかっています。

## 平安時代

「倭名類聚録」によると第195に農耕具が説明されている。犁 - カラスキ・鋤 - スキ・鋤 - クワ・鋤 - サイズエ・鋤 - カナガキクシロ・馬杷 - ウマクワ・杷 - サライ・杷 - エブリ・杷 - コスキ・鎌 - カマ・連枷・カラサオ等の農具が説明されており、又同じ頃編纂された「延喜式」の農具についての記載では鋤 - クワ・鋤 - スキ・馬鋤 - ウマクワ・辛鉢閑良 - カラスキノヘラ等の記載がある。鉄製農具が諸物に記録されており一般農民にも普及したことが窺える。



第25図 予日手辛鋤（正倉院御物複製）

### 註

(1) 鹿貞次郎 鷹崎 敏	福岡市鶴見町字板付 佐賀県唐津市 1980年12月～1981年8月31日	板付遺跡 1961年 蒙原遺跡 1981年
(2) 小林行雄 木永翠雄 日本考古学協会	大和店古弥生式遺跡の研究 豊岡県 平野進一 大江正行	唐古遺跡 1943年 登昌遺跡 1952年 日高遺跡 1978年
正岡幹夫 柳原信彦 辻 広志 村越 駿 (4) 鬼頭信男 (5) 水城県立歴史館 (6) 川原嘉久治	門山市 百間川遺跡の水田跡 脇部遺跡発掘調査概報 弥生期最北の水田址 古代の村（古代日本を発掘する－6） 農具・用具にみる農耕文化のあゆみ 農具の名称に関して	百間川遺跡 1978年 脇部遺跡 1979年 垂柳遺跡 1983年 1985年 1986年 研究紀要3号 1986年

## 第2節 遺構と遺物について

寺田遺跡の調査は、前章までに述べたような結果を得た。上野国府に関する多くの調査報告からみて大溝遺構や溝内及び牛池川の氾濫原から出土した多数の遺物と大溝遺構は、上野国府との係わりを濃厚に示すものと考えられる。

出土遺物は磨耗が少なく、板等も加工痕がすりへることなく、又虫の羽根も瓜の仲間の種子なども草繊維堆積物も長期にわたり折り重なって発見された。このことから遺物は（小破片をのぞき）そのほとんどが長時間かかって流れて来たものとは思われない。浅間C軽石降下時点ですでに湿地の地形をなし、柳・ニセアカシアが繁茂し、F A降下により湿地は次第に乾燥しはじめ、C-2～E-2グリット、C-4～E-3グリットを結ぶ地域は、浅間B軽石降下時期には生活可能な地形を呈していたと思われる。

木製遺物は総数478点、出土地点を測定したものが383点（加工木129点、自然木254点）であった。大きな物にはニセアカシアの自然木で長さ218cm太さ18cmや加工木でもC-2グリットから長さ237.4cm太さ11～12cmの梁材が出土している。図版No.27の横樋は杭のように打ち込まれた状態で出土した。

加工木は、割材、角材、板材（内1点は銅片付き板材）、柄木、棟木、梁等が出土している。その他に燃焼木が数点見られた。

ヒョウタンの仲間については（写真図版No.26）果皮片が数点出土している。そのうち1点は頭頂部が確認出来る。種子は473点、長辺14mm短辺6mmであった。

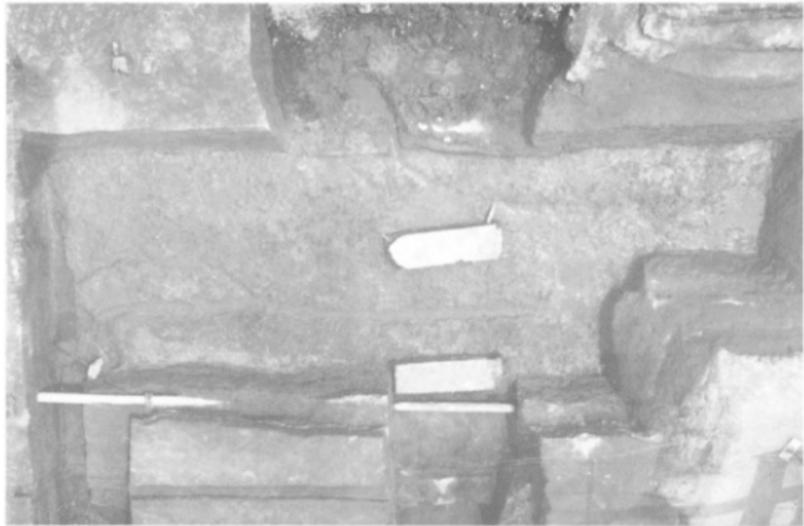
昆虫の鞘翅目の羽根が2点採拾された。

## 第3節 その他の

上野国府についての記述は「倭名類聚鈔」に初見され所在地については「上野国神明帳」等の研究から現在の前橋市大友町と元総社付近を上野国府跡と想定している。いずれにせよ南限については同一線上を取っている。（W-1）の大溝は昌楽寺、東側の溝を直線的に結ぶ事の出来る位置にある。

平城京の都城の堀割りからしても、公の施設の建物には、治水の面と灌漑及び飲料水の確保の意味からも河川の改修は必要としていたであろう。又これだけ大規模

な工事を行なうのは、古墳、館、国衛、郡衛等を建設して来た豪族の手によらなければ行ない得ないと思われる。更にNo.43の瓦には「寺」の字がヘラ書きされており、前沢和之氏「上野国分寺について」の論文中でこの瓦は宛先を書いた物であることが考えられるとしている。図版No.28小瓶や図版No.29の青磁塊の破片もこの地が国府縁辺故の資料と言えるであろう。

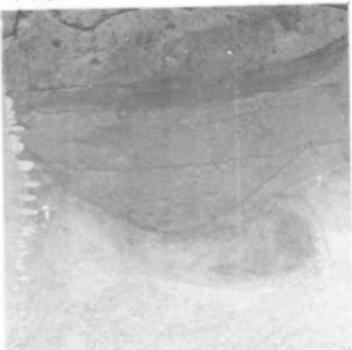


大溝全景空中撮影



第3調査区全景

図版 4



第1調査区土坑2土層断面



第1調査区全景



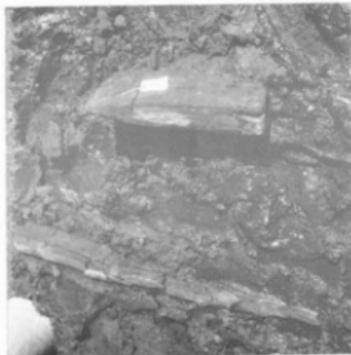
水路入口遺構全景



第2調査区全景



第2調査区水没状況



NO.19



NO.1 8 遺物出土状況



ニセアカシア（ハリエンジュ）出土状況



NO.1 2



NO.1 5

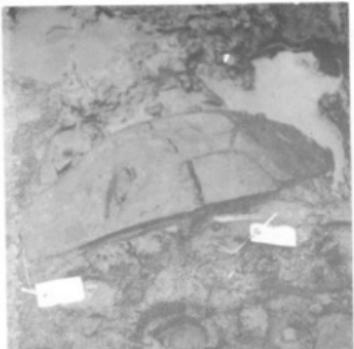


D-6グリット綿株出土状況



NO.1

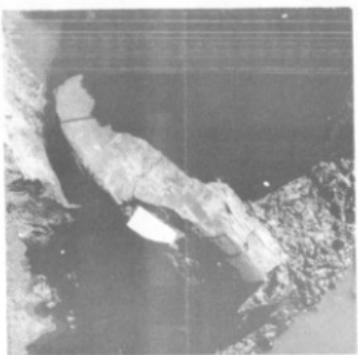
図版 6



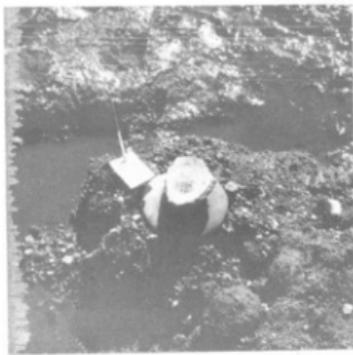
NO.24



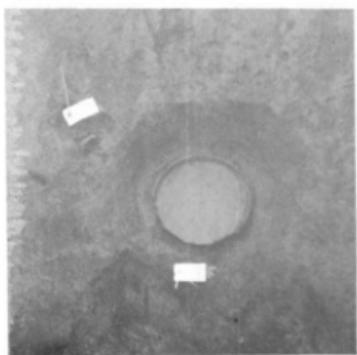
NO.13 NO.9



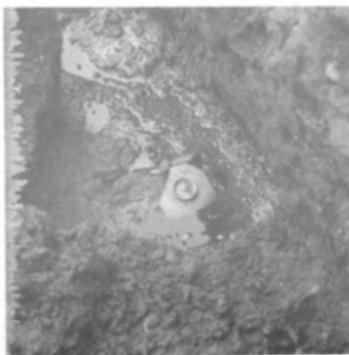
NO.22



NO.101

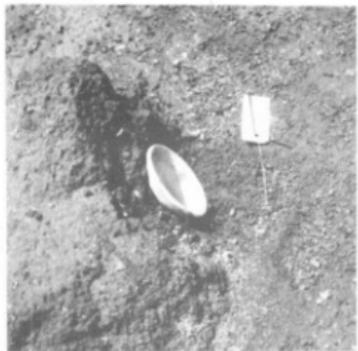


NO.81



NO.120

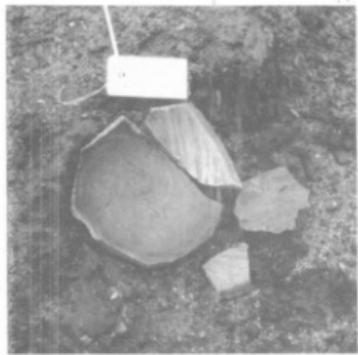
図版 7



NO.92



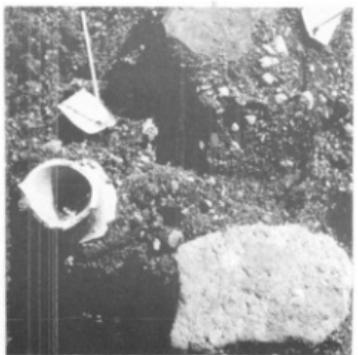
G-4グリット獸骨出土状況



NO.52



NO.111

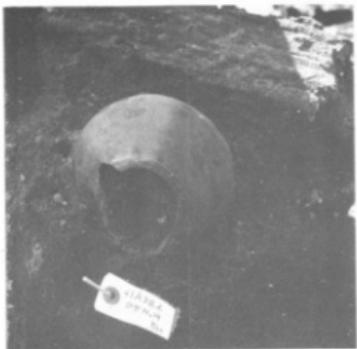


NO.124

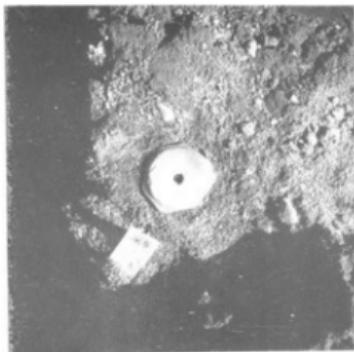


NO.66

図版 8



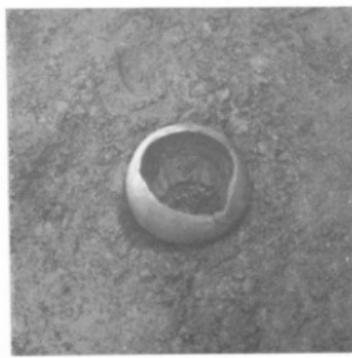
NO.108



NO.60



NO.105



NO.110



NO.80



NO.90

図版 9



NO.6



NO.12



NO.7



NO.13



NO.14



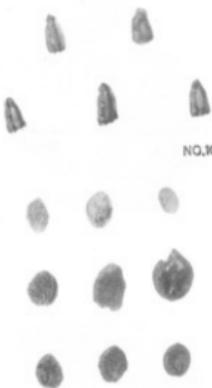
NO.8



NO.15



NO.16



NO.10



NO.17



NO.18



NO.19

NO.11

圖版 10



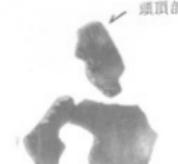
NO.20



NO.25



NO.21



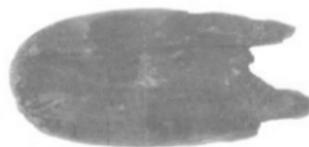
頭頂部



NO.22



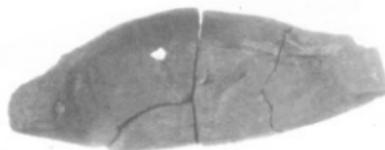
NO.26



NO.23



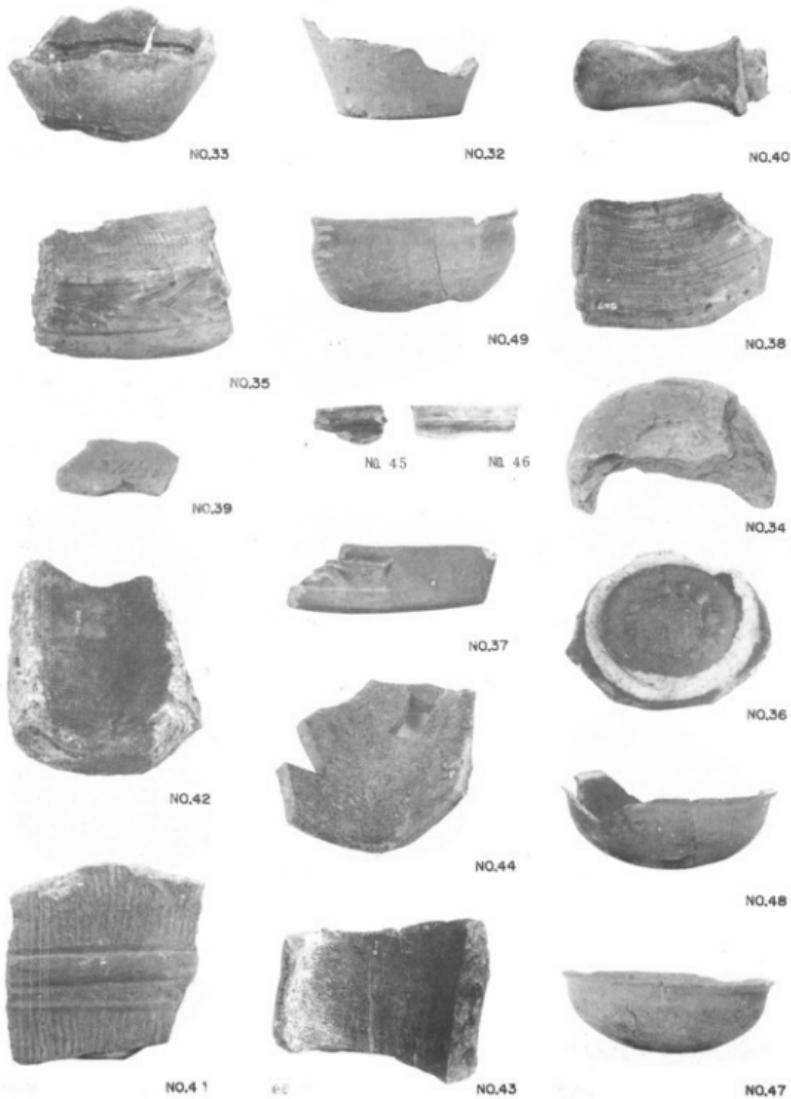
NO.28



NO.24



NO.29



図版 12



NO.50



NO.51



NO.52



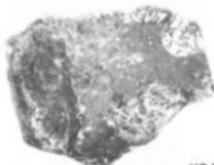
NO.53



NO.57



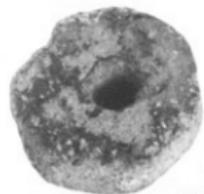
NO.55



NO.56



NO.54



NO.58



NO.59



NO.60



NO.61



NO.70

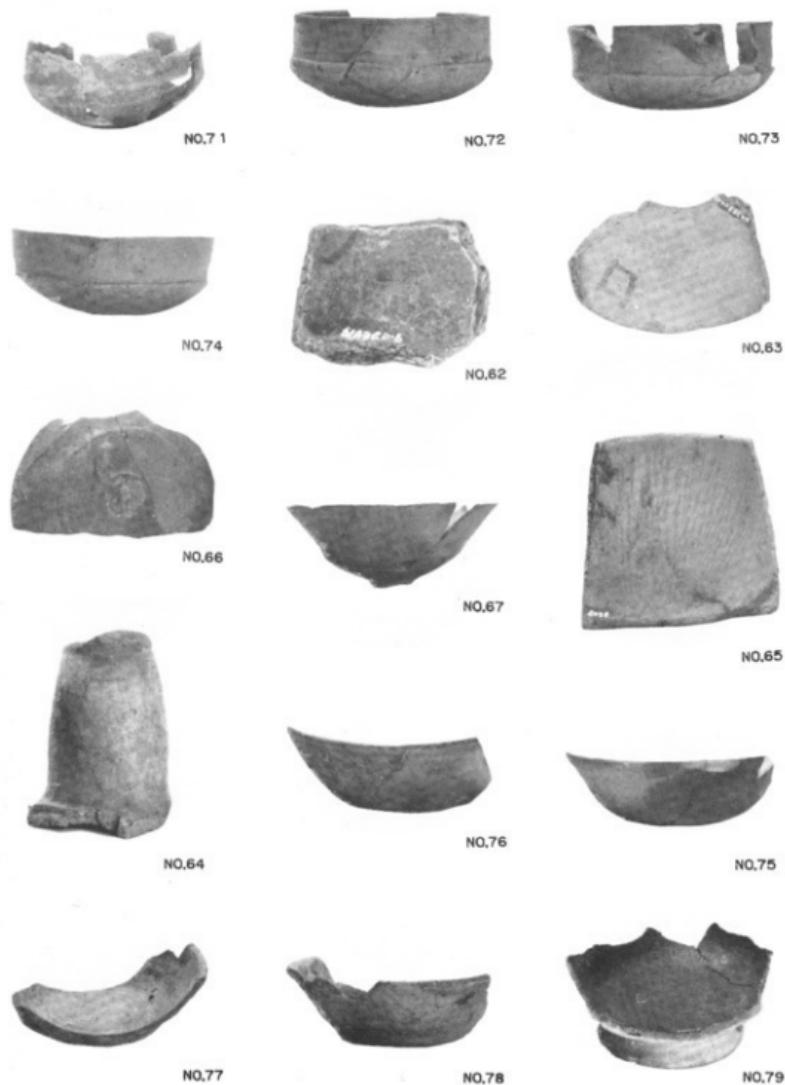


NO.69



NO.68

図版 13



圖版 14





NO.86



NO.98



NO.99



NO.100



NO.101



NO.103



NO.102



NO.104



NO.105



NO.106



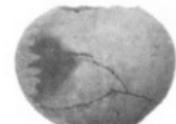
NO.107



NO.108



NO.111



NO.110



NO.109

图版 16



NO.112



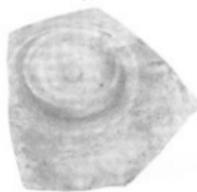
NO.120



NO.125



NO.113



NO.118



NO.114



NO.121



NO.122



NO.115



NO.126



NO.123



NO.116



NO.119



NO.117



NO.124

NO.120

NO.121

NO.122

寺 田 遺 跡

印 刷 昭和 62 年 3 月 15 日  
発 行 昭和 62 年 3 月 20 日  
編 集 スナガ環境測設株式会社  
発行者 前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
印刷所 前橋市教育委員会  
リサクラヤ印刷所

